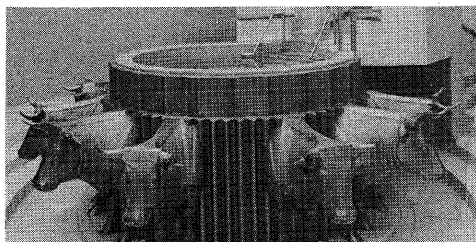




聖徒の道

11 1982



末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スベンサー・W・キンボール
 N・エルドン・タナー
 マリオン・G・ロムニー
 ゴードン・B・ヒンクレー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
 マーク・E・ピーターセン
 リグランド・リチャーズ
 ハワード・W・ハンター
 トーマス・S・モンソン
 ボイド・K・バックナー
 マービン・J・アシュトン
 ブルース・R・マッコンキー
 L・トム・ベリー
 デビッド・B・ヘイト
 ジェームズ・E・ファウスト
 ニール・A・マックスウェル

顧問

M・ラッセル・バラード
 ローレン・C・ダン
 レックス・D・ビネガー
 チャールズ・A・ディディエ
 ジョージ・P・リー
 F・エンツィオ・ブッシェ

編集長

M・ラッセル・バラード

国際機関誌

編集主幹：

ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：

デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：

ボニー・ソーンダース

デザイナー：

ロジャー・ギリング

制作：

ノーマン・プライス

もくじ

神殿と神殿事業	ゴードン・B・ヒンクレー	1
質疑応答	ロバート・J・マッシュズ	5
冬のバプテスマ	ヒルデガルド・ハール	9
初等協会の昨今		12
神権の祝福を与える	デニス・L・リズゴー	14
「あなたはこの人たちを愛する 以上には、わたしを愛するか」	セレスティア・ホホワイトヘッド	20
迷うことなく	ジェームズ・E・ファウスト	24
最後の転任	ポール・ジェームズ・トスカノ	30
ベネズエラ以外なら	マリオ・G・エチエベリー	34
今日という日	アレク・A・カスバート	36
小さなお友だちへ： アンゲル・アブレア	ジョリーーン・メレディス	39
ハロルド・ビー・リー		43
イソギンチャクのまわりで	シャーウッド・B・イツオー	46
ローカルページ		50

1982年11月号 聖徒の道 第26巻第11号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

制作・配送 東京ディストリビューション・センター

東京都世田谷区上用賀4-9-19

電話 03-427-4311

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約／海外予約2,200円(送料共)

半年予約1,100円(送料共)

1部180円、大会号350円

International Magazine PBMA 0518JA Printed in Tokyo, Japan.

© 1982 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

定期購読は、「聖徒の道用予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会/東京ディストリビューション・センター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。注：お届け先の変更がありましたら、早急にTDCにご連絡下さい。



神殿と神殿事業

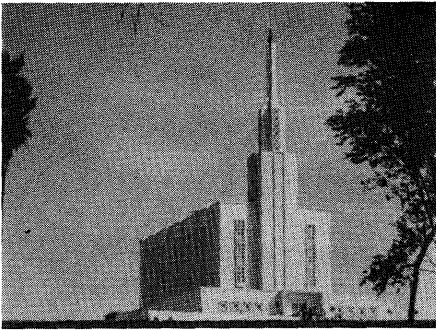
副管長

ゴードン・B・ヒンクレー

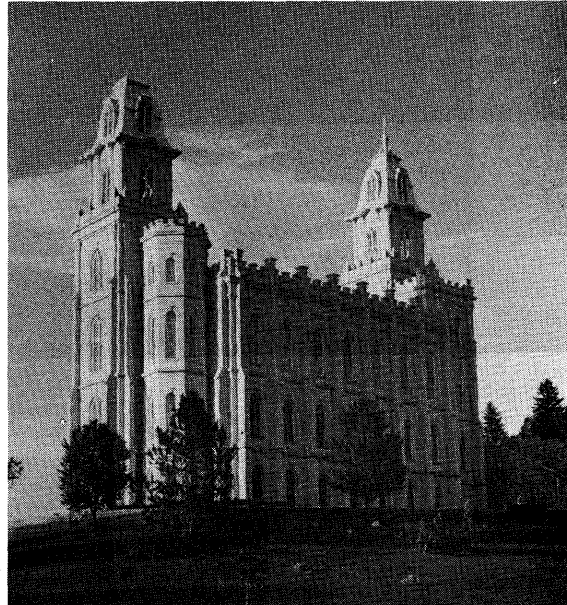
末日聖徒イエス・キリスト教会の神殿は、人の霊は永遠の存在であるという、幾百万に及ぶ末日聖徒の信仰を、世のあらゆる人々にはっきりと示しています。この神聖な建物の中で行なわれる事柄はすべて、人間という地上に生を受けた朽ちゆく存在が本当は永遠であるという信仰に基づくものです。この神聖な主の宮居に参入

する人々にとって、これは単なる確信以上のものです。まさに事実であり、何ものも抑えることのできない、不動の信仰なのです。

もしその信仰がなければ、神殿の建設維持に投ぜられる巨額の費用も、そこで執行される儀式にかけられる莫大な時間もすべて空しいものとなってしまいます。



左：ニュージーランド神殿
右：マンタイ神殿（ユタ）



●神殿と神殿事業

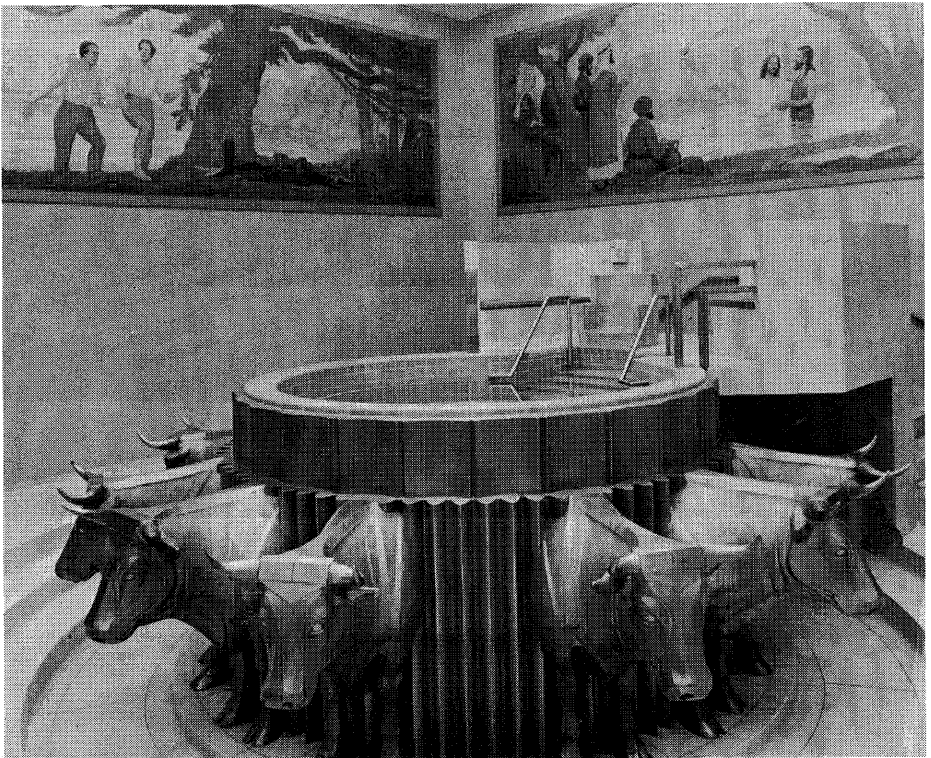
もちろん末日聖徒のほかにも、人間の永遠性を信ずる人々はいます。救い主の復活を事実として受け入れるクリスチャンであれば、そう信ずるのが当然です。またキリスト教徒以外にも、生命は永遠であると信じている人々はいます。時の初めから、死は人類にとって大きな神秘でした。「人がもし死ねば、また生きるでしょうか」(ヨブ 14:14) というヨブの疑問は、あらゆる時代の人々が心に抱き続けてきたものです。これは救い主や予言者たちの教えの中でも

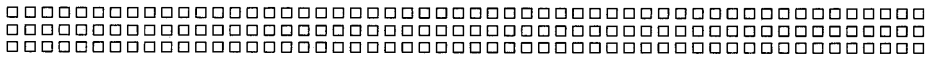
アイダホ・フォールズ神殿バプテスマフォント(アイダホ)

論じられていますが、永遠の生命を高らかにうたいあげるこの宣言は、真昼の太陽のように輝きを放っています。嘆き悲しむマルタに語られた救い主のみ言葉は、不死不滅を信ずる人々の信仰の柱となってきました。

「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。

また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。」(ヨハネ11:25-26)





パウロの次の言葉も、時の流れを越えて、神聖な贖いを証してきました。

「アダムにあってすべての人が死んでいるのと同じように、キリストにあってすべての人が生かされるのである。」(I コリント 15 : 22)

事実救いは、すべての人が生きることができるようその命を捧げたもうた神の御子を通して与えられるのです。

しかし、肉体の復活をしのご、さらに大きな目標がもうひとつあります。それは、御父の王国に昇栄するという事です。昇栄するためには神の戒めを従順に守っていくことが求められます。またそれは、何よりも先に、神を永遠の御父として、そして御子を生ける贖い主として受け入れることから始まるのです。昇栄するためには様々な儀式を受けなければなりません。それはどれひとつ欠かすことのできない重要なものばかりです。最初に受けるのが、水に沈められるバプテスマです。救い主は、この儀式を受けずにはだれも神の王国に入ることとはできないと言われました。次に来るのが、みたま、聖霊の賜による新生です。それからさらに、男性であれば神権への聖任、参入資格を備えた男女に与えられる神殿の祝福などが続きます。神殿の祝福の中には、主のみ前に清い者となるための洗いや灌油の儀式、また、教えを受けるためのエンダウメントの儀式もあります。エンダウメントに伴う義務と祝福は、私たちを福音の原則に従って行動するように促してくれます。地上でつなぐことを天でもつなぐ結び固めの儀式は、家族を永遠の絆でひとつにします。

自分自身のために受ける人々にとって、これらの儀式は素晴らしい経験となります。しかし、様々な宗教儀式がある中で、神殿の儀式が他に類するもののない素晴らしい儀式とされるのは、人に永遠に続く結果をもたらすものだからです。

神殿は神の宮居であり、神は永遠の御方です。これらの神聖な儀式を行なうために、特別な宮居を建てよと命じられたのは神御自身なのです。神殿に代えることのできるものは地上に何ひとつ存在しません。

しかし、これらすべての祝福も、これまで地上に生を受けた神の子供が何十億といえる中で、参入資格を備えたごく一部の人々にしか与えられないとしたら、随分と条件の厳しい排他的なものではないでしょうか。しかし、天父は御自分の息子、娘たちに対する大いなる愛のゆえに、ひとつの道を備えられ、最終的にはすべての人が神殿の儀式を受け入れ、恵みを受けることができるよう機会を与えて下さいました。

主の宮居ではすべての死者にこの機会を与えるため、大いなる身代わりの業が進められていますが、それは義務であると共に祝福でもあります。今生きている人々が、福音を聞いて受け入れる機会に恵まれずにこの世を去った人々の身代わりとなって、この地上でしか執行されない儀式を受け、それに伴う祝福をもたらすのです。なんと素晴らしいことではないでしょうか。幕のかなたの死者たちは、この代理の儀式の結果をいやおうなしに受け入れさせられるわけではありません。しかし私たちは、この計画を定めたもうた主御自身から、すでに

●神殿と神殿事業

世を去った人々のために代理の儀式を行なうよう、固く命じられています。このようにして進められる業は非常に重要な、他に例のないものです。自発的な奉仕によって進められる素晴らしい愛の業なのです。

私は、主の宮居で死者の身代わりとして働く数多くの末日聖徒を見る時、驚嘆の念を覚えると共に、すべての人に祝福を与えるためにひとつの道を備えられ、この無私の奉仕の業を行なう上で必要な信仰を与えて下さることを、全能の神に感謝する思いで一杯になります。

この重要な奉仕の業に働く人々は、亡くなった人々から感謝の言葉を聞かされることはありませんし、それを期待していません。幕の向こうから現世の人に語りかけてくる声があるというのは確かに真実ですが、それはきわめて例外的な事柄です。神殿の中で働く人々もそのような示しを期待しているわけではありません。信仰と、聖霊の力によってもたらされる知識、確信に基づいて、ひとつの民としてその働きをしているのです。ほかにも奉仕の業はいろいろありますが、どれにも働きに応じた見返りと言えるものがあります。主の宮居での奉仕の業に多くの時間を捧げる忠実で熱心な人々の心の中には、いつか次の世で、自分が受けた代理の儀式を通して祝福を受けた人々から感謝される時が来るという期待感があるかも知れません。しかしどう考えても、それだけで彼らの献身的な働きの原動力を説明し尽くすことはできません。

この驚嘆すべき奉仕の業についてよく考えてみて下さい。他のいかなる奉仕の業に

についても言えることですが、この働きの中にあるのは、まさしくキリストが持ちたもうと同じ精神なのです。神殿で働く人々の動機には、何ひとつ私心がありません。世の中で、この無私の精神以上に強く求められるものがほかにあるでしょうか。

しかし、主のみ業のすべてがそうであるように、この業にも現世と来世の双方において味わうことのできる祝福があります。救い主は、愛をもって神のみ業に献身的に働くすべての人々を称賛して、次のように言っておられます。「自分の命を救おうとする者はそれを失い、私のために自分の命を失っている者は、それを得るであろう。」(ジョセフ・スミス訳マタイ10:39)

ホームティーチャーへの提案

1. 神殿での奉仕の業を通して得た祝福に関して、自分の経験を話す。担当家族に同じような体験や思いをしたことがないか尋ねる。
2. このメッセージの中に、朗読したり話し合ったりするのによい聖句や言葉はないだろうか。
3. 主の宮居において執行される儀式は、天父の子供の昇栄にとって、どのような意義を持つのだろうか。
4. 「神殿で働く人々の動機には、何ひとつ私心がありません」と述べられているが、それはなぜだろうか。
5. この話し合いをより充実したものとするために、訪問する前に家長と話し合っておくとよい。

冬のバプテスマ

ヒルデガルド・ハール



私 の両親が教会について学び始めたのは、第一次大戦最中のドイツです。当時ドイツは宣教師の入国を一切認めていませんでした。母は最初、甥から教会のことを知らされました。その甥は私よりは年上で、教会に入ったため勤まされていました。父は母が私たち子供を連れて集会に出ることは許してくれましたが、自分自身は特に何の関心も示しませんでした。ところがある時、職人仲間のひとりからモルモン経を見せられ、教会のことを聞かされたからは、モルモン経を読み、福音を学び、私たちと一緒に教会に行くようになりました。

母は支部長からバプテスマを受けてはどうかと言われた時、自分と子供たちは準備ができているが、できれば夫と一緒に受けられるようになるまで待ちたいと答えました。父が「私だって準備はできている」と言うと、母は父がまだやめずにいたタバコのことを指摘しました。すると父はパイプを壊し、火の中にくべてしまいました。宝石と時計の職人だった父は高い机を前にして、床まで届くほど長いパイプをくわえて仕事をするのが常でした。タバコをやめるのはさぞ大変だったろうと思います。

当時はバプテスマを受けるのは非合法とされていた時代でした。私たちは夜になるのを待って、市街電車の停車場で何人かの教会員と待ち合わせ、バプテスマを行なう川まで行くという段取りを決めておきました。当日、私は学校から帰って来ると、とても気分が悪くなり、夕食も取れないほど

の状態になってしまいました。いざ出発という頃には、さらに具合が悪くなっていて、母から今回は待って別の機会にした方が良いと言われました。でも私は是が非でもこの機会は逃したくないと一歩も譲りませんでした。ケムニッツ川へ向けて1時間ほど電車で行った後は、徒歩で公園を通

電車の停車場へ
向かう道すがら、
私たちは
讃美歌を何曲も歌いました。

り抜け、目的地へ進みました。

電車を降りた時には、口をきくのはもちろん、歩くこともできないほど具合が悪く、父や兄弟たちが交代でおぶって運んでくれました。目的地に着くと、立ち番をしている警官がひとり見えましたが、よく見ると木にもたれかかりながら居眠りをしているのです。川に続く道は柵でさえぎられていて、私たちは、兄弟たちがそこに張り渡された有刺鉄線を押さえている間に腹ばいで忍び込みました。川一面に張りつめていた氷が割られた後で、私はその夜の内にバプテスマを受けたいという気持ちに変わりがいかどうか改めて聞かれました。すでに真夜中になっていましたが、まだ口が



きけないでいた私は、うなずいて返事をしました。子供3人、大人8人のその夜のバプテスマ志願者の内、私が最初に受けることになりました。冬の川は身を切られるほどの冷たさだったはずなのですが、水に沈められた時、私は自分の体から何か厚い殻^{から}がはぎ取られるような気がしました。体の具合も自分の力で堤防を上り切れるほどよくなっていました。母や幾人かの姉妹たちに手伝ってもらって着替えを済ませた後は、小さな折り畳み式の椅子に座って確認の儀式を受けました。

全員バプテスマを終えると、私たちは細い道を引き返し、鉄条網をかいくぐり、眠ったままの警官の側を通り抜けていきました。明るい月の光に照らされ、町の中を電車の停車場へ向かう道すがら、私たちは讚美歌を何曲も歌いました。

戦争が終わってしばらくしてから、ドイツにも再び宣教師が派遣されてくるようになりました。ある日曜日のこと、我が家では、アメリカから来たばかりでまだドイツ語を話すことのできないひとりの宣教師を食事に呼びました。私の両親は4年ほどイギリスのリバプールにいたことがあり、英語は多少話せました。ところがその晩教会で行なわれた聖餐会で、この新任の宣教師が話を依頼されたのです。私はドイツ語が全然できないのに話を頼まれた彼を気の毒に思い、一体どんな話になるのだろうかと考えていました。ドイツに来て大分たつ他の宣教師からドイツ語の話し方を教えても

らう時間もなかったはずでした。

しかし、彼は1時間以上も話し続けました。内容は、先に終わったばかりの戦争よりも、もっとひどい戦争が起きるから、聖徒たちはアメリカに渡るようにというものでした。先の戦争の時の苦しみがまだ生々しく記憶に残っていた私たちにとって、それは恐ろしい話でした。帰り道、私はあの宣教師が何語を話したのか両親に尋ねました。私自身英語に関する知識はなかったものの、それが英語でないことはわかりました。もちろんドイツ語でもなかったのです。しかし彼の語った言葉の意味はすべて理解していました。父は、あのような体験をすることは二度とないだろうから、絶対忘れてはならないと私に言いました。その長老は異言を語ったのです。

その日から両親はアメリカ移住の計画のこと以外はほとんど何も話さなくなりました。最初にアメリカに渡ったのは父で、1年後に母と子供たちを呼び寄せました。母は初め、心臓病があったために出国はできないと言われていたのですが、それならとにかく私たち子供だけでもと言い張り、6カ月後には私たちと一緒に渡米する許しを取りつけてしまいました。

あの宣教師が予言したことは、ことごとく事実となりました。私の姉は改宗することなく、今でもドイツにいますが、私たちが去ってからのドイツの様子を話してくれたことがあります。それは、まさしくあの宣教師が予言した通りのことでした。

初等協会の昨今



中央初等協会会長会、会長：ドゥワン・J・ヤング姉妹、第一副会長：バージニア・B・キャノン姉妹、第二副会長：マイカリン・P・グラスリー姉妹を囲んでお話をお聞きしました。



記者——御三人とも、2年半以上も中央初等協会会長会で働いてこられたわけですが、初等協会に関して学ばれたことを幾つかお話しいただきたいのですが。

ヤング姉妹——私が学んだのは、国によって子供たちはそれぞれ違ってはいますが、共通している点の方が多いということです。どの国の子供も、同じような欲求、望み、学習意欲を持っています。どこへ行っても、私は子供たちの可能性や潜在能力に驚かされます。

キャノン姉妹——私がお会いした指導者の皆さんも、子供たちと同じように意欲的でした。中には教会歴が浅くて、十分な訓練も受けておらず、知識も少ないという方もいらっしゃいますが、どうしたら子供たちを助けることができるか、熱心に積極的に学ぼうとしていらっしゃいます。

グラスリー姉妹——私も指導者の子供たちに対する関心については、いつも感激させられてきました。子供たちは今、かつてな

かったほど、外部からの影響にさらされています。初等協会の歴史は、子供たちを思いやり、そのために献身的に働く指導者や教師の歴史なのです。

記者——ヤング姉妹、初等協会の目的については、どのようにお考えでしょうか。

ヤング姉妹——初等協会の目的は、レッスンや活動を通して、子供たちにイエス・キリストの福音を教えることです。

記者——その目標は果たされているとお考えですか。

ヤング姉妹——そのうちのひとつ、すなわちレッスンを通して福音を教えることに関しては、果たされていると思います。しかし、活動の方はというと、もう少し初等協会の指導者や教師を励ます必要があると思います。子供たちがレッスンで学んだことをどう応用するかを学ぶのは、結局、活動を通してなのですから。

例えば、日曜日の初等協会の一環として「分かち合いの時間」がありますが、その時間に子供たちは、他のクラスの子供たちの前で、クラスの発表を行なうことができます。少なくとも、分かち合いの時間の半分をクラスの発表に使って、子供たちが自分の学んだことを他の子供たちに教える機会を持てるようにしていただけるとよいと思います。

グラスリー姉妹——子供たちは年に4回の

活動の日に参加することを通して、福音の様々な面をいかに応用するかを学ぶことができます。活動を行なえば、体力面の事柄も教えることができます。例えば知恵の言葉の価値を強調したりもできます。奉仕活動などをすれば、自分自身を捧げることを学ぶこともできるのです。

記者——初等協会での学習に関して、親はどのように子供たちを助けることができるでしょう。

ヤング姉妹——日曜日の集会が終わって家に帰ってきたら、お父さん、お母さん方はお子さんたち一人一人に「今日は初等協会でどんなお話をしたの」とお聞きになっていただきたいと思います。私でしたら、もし子供が明らかにいつも何も学ばずに家に帰って来るようであれば、子供の先生や初等協会の会長と話し合って、そのクラスがどうなっているのか突き止めます。私は親として、レッスンがきちんと行なわれているか、自分の子供に参加の機会があるかどうかは知っておきたいと思っています。

キャノン姉妹——親が子供にしてやれる最も重要なこととして、子供が初等協会ですんできた事柄を家庭で補強してやるということがあげられると思います。教会での経験やレッスンに家庭での励ましが加わってこそ、子供たちは靈的な強さを身に付けていくのです。

神権の祝福



を与える

デニス・L・リスゴー

× ルケゼデク神権者には、病気の人に神権の祝福を施す儀式に携わる特権と権能が与えられています。ヤコブはこう書いています。「あなたがたの中に、病んでいる者があるか。その人は、教会の長老たちを招き、主の御名によって、オリーブ油を注いで祈ってもらうがよい。」

これを行なうには権能はもとより、信仰と靈感がどうしても必要になってきます。

「信仰による祈は、病んでいる人を救い、そして、主はその人を立ちあがらせて下さる。」(ヤコブ5：14—15)

信仰、靈感、権能、この3つは神権の祝福を施す時に欠くことのできないものです。

近代の使徒マシュー・カウリー長老がニュージーランドでマオリ族の父親から赤ん坊の祝福を頼まれた時の話を聞いたことがあります。カウリー長老が祝福の儀式を行なおうとした時に、その赤ん坊の父親からこう言われたということです。「この子に命名する時に、どうか視力も与えてやって下さい。この子は生まれながら目が見えないんです。」

カウリー長老は一瞬ぎくりとしたと語っています。「私には自信がありませんでした。でもポリネシア人のその父親には子供が持っているような信仰があることを知っていました。その信仰は心理学やいかなる人間

の知識をもってしても薄れることなく、ただひたすらに神を信じ、御子イエス・キリストを通してなされた約束を信じる純粋な信仰でした。

私はその子を命名し、それから勇気をふりしぼって、その子に視力が与えられるようにと祝福しました。

……私は数カ月前にその子に会いました。もう6、7歳になっていました。あちこち走り回っていて、私と変わりなく物を見ることが出来ます。」

私もニュージーランドで伝道していた時に、マオリの婦人のことで力強い経験をしました。その女の人はひどい病気で、手術を受けるために病院に運ばれました。太った体と高齢のために、快復の見込みはほとんどありませんでした。

彼女は私に祝福してほしいと言ってきました。「長老、あなたが祝福を与えて下されば、私はきっと元気になりますよ。」私は神権者としての責任を心に強く感じて、儀式を行なう前に彼女のベッドの傍で祈りました。それから私を通して彼女に祝福が授けられたのですが、同僚も私もその力の勢いに驚いてしまいました。そして私は、彼女に元気になってもらいたいという個人的な願いによって祝福を述べてしまったような気がして、心配になってきました。彼女は

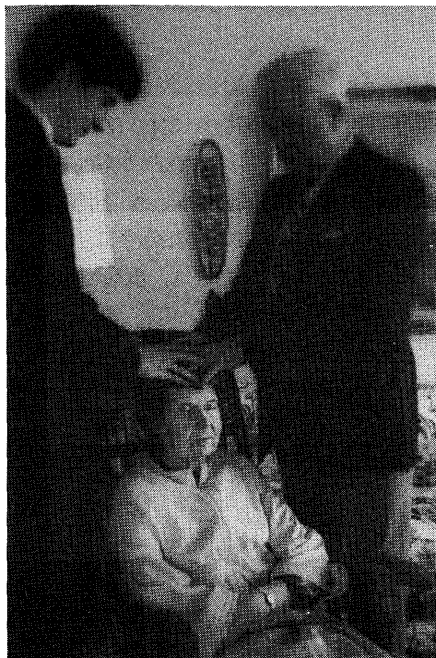
●神権の祝福を与える

私の手を取って言いました。「ありがとうございました。次の日曜日には教会でお目にかかれると思います。」

私はまさかと思いました。しかし、手術が成功して、彼女はすっかり元気になっていたのです。次の日曜日の証会に、彼女はちゃんと出席していました。肉体的にはまだまだ弱々しい彼女でしたが、立ってはっきりとした口調で、大変な時に助けてもらったことを主に感謝していました。彼女がこのように元気になったのも、固い信仰を持って祝福を受けたからだと言えるでしょう。

ここで心に留めておかなければならない大切なことがあります。それは、主の思いは私たちの思いと異なるということです。神権の業を行なう主の代理人として、私たちには主の靈感を受ける義務があります。私は、祝福を与えることで身のひきしまるような経験をした宣教師を知っています。彼は、ニュージーランドで支部の教会堂の修理に携わっていました。その時、屋根の修理をしていた支部長が、足を踏みはずして下の舗装道路に転落してしまいました。この宣教師はすぐに走り寄って、彼に力強い祝福を宣言し、彼が命を取りとめ、完全に快復すると約束しました。ところが数分後に支部長は息を引き取りました。

何とも幻滅したこの宣教師は、アパートに戻り3通の手紙を書きました。伝道部長と出身ワード部の監督、そして大管長にあてた手紙です。その手紙は神権を自分から



病気の時に
癒しの儀式が必要ですが、
ほかに子供は……
様々な悩みを持っており、
祝福を必要としています。

取り上げてほしいこと、宣教師としての働きを放棄したいという内容でした。そしてペンを置き、床に就きました。

しかし彼は、それから一晩中考え、悩み、苦しみ、祈った末、主のみこころがなされたことを理解したのです。そして、癒しの儀式を執り行なう前には、主の靈感と導きを熱心に求めなければならないことを知りました。

私も同じように、あわてて癒しの儀式を行なったことがあります。妻のマーティーは妊娠の初期に幾つか問題がありました。それで私はすぐに彼女に祝福をし、力強い言葉を並べて、彼女も生まれてくる赤ん坊も元気であると約束したのです。私はその儀式を終えるや、自分のしたことが誤っていたことを知りました。子供はすでに体内で息絶えていたことがわかったからです。

断食と祈りの後、私はひとりの神権者に手伝いをお願いして、再び妻に祝福を施しました。この度は主の導きに耳を澄ましました。私は子供は元気であるとは約束することができませんでしたが、妻は快復して他の健康な子供たちの母でいられることを約束しました。その子は助かりませんでした。私たちには祝福にもあったように現在4人の元気な子供がいます。二度目の祝福の時、私は自分自身の個人的な希望は何も口にはしませんでした。妻と私は共にみたまの慰めによる心の平安を十分に感じていたのです。

スペンサー・W・キンボール大管長は、神のみこころと病人に癒しの儀式を執り行なうこととの関係を次のように説明しています。「癒しの儀式が行なわれ、そこに十分な信仰があり、かつその病人が『死の命』を受けていないならば、必ず癒されるはずであると、主は私たちに断言しておられる。

(教義と聖約42:44—48参照)そこには3つの要素があり、そのすべてが満たされなければならないのである。この儀式に従っていない人、また十分な信仰を表わそうとしない人や表わすことのできない人が非常に多い。もうひとつの要素も大切である。すなわち、その人が死の命を受けていないかどうかということである。」

キンボール大管長はまたこう述べています。「神権の力には限りがないが、神は知恵をもって私たち一人一人の上にある制限を置かれた。私が完全な生活ができるようになれば、神権の力ももっと高まるであろう。しかし、神権によってさえも私にすべての病人を癒すことができないことを、私は感謝している。私は死ぬべき人に癒しを与えることもできるかもしれないし、苦しむべき人の苦しみを和らげることもできるかもしれない。しかし、それは、神の目標を妨げることになるのではないだろうか。」

次に、神権の祝福を与えてくれるよう頼まれた時に気をつけなければならない大切なことがあります。私たちはただ主のみ力を信じてこれを行なうのではなく、主の霊

●神権の祝福を与える

感を受けたい、主のみこころを知りたいという謙遜な願いを持たなければなりません。主の導きを受けた時にこそ、主のみこころをなすことができるのです。

私の知っている神権者の中に、靈的な事柄に関する経験が十分でなかったり、靈感を感じ取ることができないために、間違ったことをしてしまうのではないかと、変なことを言うてしまうのではないかと恐れて、祝福することをちゅうちょしている人がいます。また、神権の祝福を与えるというより、むしろ天父に祈りを捧げている人もいます。しかし癒しの儀式を行なう場合、天父に祈ることと天父から靈感を受けることの双方を行なうのが自然です。なぜなら、このふたつは天父との交通になくなくてはならないことであり、その点において、神権による癒しと祝福、また信仰と靈感との相互関係にも通じるからです。

時々、この儀式を行なうのに自分はふさわしくないと感じることもあるものです。しかし、メルケゼテク神権を受け、神権者として正しい生活をしている者であれば、神権を行使する責任があります。しかし、私たちが第一に心に留めるべきことは、祝福を施す前に謙遜な祈りを捧げて主の助けを請うことです。

ですから、厳密に言えば、病人に行なう癒しの儀式は神権による儀式であり、幾つかの大切な点で祈りとは異なっています。これは、神権の権威すなわち神のみ名によ

る力で執り行なう儀式なのです。つまり、私たちが導きに従う時に、神の力を使って神の代わりに行なうことを主が許しておられるのです。祈りが主と交わる力強い手段であることは言うまでもありません。そして祈りが多くの奇跡を生んでいます。しかし主は、私たちが神権の権能を通して癒しの儀式を行なうことと、神権の力を行使してほしいという適切な要請を受けることを認めておられるのです。このように神権を行使することによって、癒しの儀式の中に主を招き入れることができます。主はこう約束しておられます。「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである。」(マタイ 18:20)

神権者として、私たちには癒しの儀式を行なう機会がたくさんあります。定員会会長の要請を受けて、夜でも病院に行って儀式を施します。また、病に苦しむワード部会員のもとにかけつけます。しかし、神権を使う最も大切な所は自分の家庭です。家族の病氣、出産、落胆、失望、このような場合に神権を行使し、靈感による祝福を与えることができます。

病氣の時に癒しの儀式が必要なのは当然のことですが、ほかにも子供は、人間関係に関する問題や友達との圧力、勉強の上での問題、教師との問題など様々な悩みを持っており、祝福を必要としています。子供のために早くから靈感を受けることによって、

父親は子供との信頼関係を高めることができ、それは年々強まり、やがて家族の強い絆となるのです。苦しい時に父親が親身になって霊的な関心を向けてくれたことを覚えている子供は、もっと重大な事柄に直面した時に容易に父親を信頼することができますでしょう。子供たちは、伝道、進路、結婚といった人生の大問題にぶつかる前から、父親の祝福を通して得られる靈感を必要としているのです。(慰めや勧告の祝福を与える時には油は用いない)

ひどい状態にあった息子に、癒しの儀式を行なった経験があります。それは夜の中で、長男のダリンは耳の痛みで苦しんでいました。あまりの痛さに大声を上げて泣いていました。ところが祝福をすると痛みがとれたと言って寝てしまいました。力を使い果たしたのでしょうか。ぐっすりと寝入ってしまいました。

翌朝、息子を小児科医に診せると、ダリンの鼓膜は夜のうちに破れ、その結果感染力が弱まったので、眠れたのだと言われました。私たちは鼓膜がいつ破れたかわかったので驚いてしまいました。小児科医は、聴力がこの先ずっと低下する恐れがあるので、薬で感染を止めた後で耳鼻科へ連れて行くようにとアドバイスを受けました。

数週間して専門医に診せたのですが、ダリンの耳には何の異常も見いだせないという医師の言葉に、私たちは驚きました。鼓膜は完全な状態で、破れた跡も残っていない

いと言うのです。このことは、主のみ力の偉大さと、神権の祝福の効果をはっきりとした方法で教えてくれた実に厳粛で力強い経験でした。

主は、私たちの自ら信ずることが「神の前に強くな」る(教義と聖約121:45)と約束しておられます。こうして神が与えて下さった信頼の心を持つことによって、私たちは神から授かった権能を行使し、それを敬虔かつ積極的な方法で用いる機会を見いだすことができるのです。

話し合いのために

「神権の祝福を与える」を個人であるいは家族で読んでから、次の事柄について話し合ってみましょう。

1. 神権による癒しの儀式を行なう時に祈りはなぜ大切か。信仰はなぜ大切か。
2. 神権による癒しの儀式を行なう前に「主の靈感と導きを熱心に求めなければならない」のはなぜか。
3. 健康が快復するという神権の祝福を受けながら、快復しなかった人を知っているか。そのような場合、ここに引用されているスペンサー・W・キンボール大管長の言葉は、どのような支えとなるか。
4. 慰めや勧告の祝福を受けたことがあるか。その時の気持ちはどうだったか。このような祝福を行なうのが適切だったのは家族がどのような時であったか。

「あなたは
この人たちが
愛する以上に、
わたしを
愛するか」

セレスティア・ホワイトヘッド

私はその頃、6歳を頭に5人の子供を持つ若い母親でした。夫のバンは法律学校の1年目を終えたところでした。私たちは福音に基づいた生活を営み、主からの恵みを受けてきました。実際私たちの結婚生活は深刻な問題とは無縁だったのです。また私の生活の中心は家庭でした。私は妻であること、母であることに喜びを抱いてはいましたが、毎日が家事や日々の雑用で明け暮れていて、霊的な刺激に欠けていると感じることがありました。しかし私にはどのように生活を改善していけば良いかわかりませんでした。祝福に対する感謝の気持ちを示そうとも思いました。でも、逆境に遭ったこともないのにどれだけ祝福されているかなどは知りようがあるでしょうか。

しかし、すべての物事には必ずその反対のものがなければならないというリーハイがヤコブに語った教えが(Ⅱニーファイ2:11-15)、私の人生に間もなく新たな意義を持ち始めることになったのです。今では私は、生涯において本当に価値のある物に気づくには、反対や苦しみや逆境を経験しなければならないことがよくわかっています。また主のみこころを受け入れ、主に全面的に頼ることが、逆境を経験することによって得られる最大の教訓だということも知りました。

目まいや吐き気、平衡感覚の障害など、気がかりな症状に見舞われたのです。その

時私には乳飲み子がいましてし、その上バンは法律の期末試験を控えていました。絶対に病気になってはいけない時に病気になってしまったのです。しかし私たち家族は、この事態を何とか切り抜けなければなりません。医師は内耳を調べた後、私を神経科へ回しました。そして検査のため早速入院することになったのです。

検査は苦痛を伴い、激しい頭痛と吐き気

に悩まされました。私は苦痛が和らぐように、また耐える力が与えられるように繰り返しお祈りしました。するとその祈りは即座に答えられ、私は驚き、また謙遜な気持ちになったのです。医師達は腫瘍の疑いを持っていました。それは少しショックでしたが、私とバンは、腫瘍といっても大したことはなく、手術すれば治るものだろうと単純に考えていました。しかしある朝神経

私は苦痛が和らぐように、また耐える力が与えられるようにお祈りしました。するとその祈りは即座に答えられ、私は驚き、また謙遜な気持ちになったのです。



科医が、気落ちした様子で病室にやって来て、脳腫瘍が発見されたと宣告したのです。その時の私の衝撃を想像してみてください。重症でした。医師は夫に、この種の腫瘍は手術が不可能で、おそらく悪性のものだろうと言いました。私たちふたりは呆然としました。突如として樂觀的な考えは消え、未来が崩れ去って行くのを感じました。

私は生きていなければならない理由をすべて考えあげました。——パンをひとりにするなんてことできないわ。彼はこれから先どうやっていくの。それに子供たちはどうなるの。

多くの人々が私たちのためにお祈りをしてくれました。私の母は、万一の場合代わられるものなら自分が代わりに死にますようにと祈ってくれたそうです。私はそのことを何週間も後になってから知ったのですが、今でも思い出すたびに胸が熱くなります。母はどんなに私を愛してくれていたことでしょう。また同じワード部の会員は断食し、お祈りをしてくれました。私は大きく心を動かされました。入院している間は、これほど多くの素晴らしい人々が心配してくれていたなんて思ってもみませんでした。

夫は苦悩と戦っていました。後悔はしませんでした。でも私たちは一緒に長生きしよう和前々から話し合っていたのです。私たちはいつも一緒でした。いまさら離れ離れになって一体どうやって暮らしていった

ら良いのでしょうか。夫はどんな事態が起ころうと受け入れられる理解力と平安と勇気が得られるように祈りました。

私も前向きの姿勢でいられるように祈ってはいましたが、あの日が来るまでは答えは与えられませんでした。その朝私は何気なく聖書を開いていましたが、私の目は、主がペテロに言われた「あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」という言葉に釘づけになったのです。(ヨハネ 21:15) この質問は私に向けてなされたように感じました。私は主をこの世のどんなものよりも愛しているのでしょうか。他の何よりも、たとえ私の命そのものよりも。私は答えました。主よ、その通りです。私は自分自身の命よりもあなたを愛しています。

ついに私は主に従い、「みこころが行なわれますように」と心から言えるようになりました。そして主に従う気持ちになれて、言いようのない平安で満たされました。私はもう恐くなどありません。つらいことがあるとすれば子供たちのことだけです。彼らが私と離れ離れになって、他のだれかの手で大きくなるなどということにがまんできるのでしょうか。でも私たちは神殿で結び固められた永遠の家族です。私たちが再びひとつとなるのは確かなことです。

この一連の出来事で私は地球で過ごす期間の本当の意味をはっきり知りました。永遠の計画から比べると、百年生きられたと

しても地球で過ごす期間はほんの束の間です。だれかが地球を去る時、残された人が寂しく思うのは当然ですが、人生を素晴らしい物で満ちし、成長し続けられるように努力するべきです。亡くなった人も、霊界ではなすべきことがたくさんあるのです。

神様に従うようになるにつれて、私はみたまが常に燃え、私の中の力が愛する人たちに注ぎ込まれるのを感じました。また霊界では多くの人が私を待っていてくれるから、恐れたり寂しがったりする必要はないことがわかり始めました。愛する実のお父さんと義理のお父さんが霊界で私を迎えてくれるでしょう、しかし自分の残り少ない人生をきちんとしておかなければならないという思いが次から次へと湧いてきました。もしなんとか生き続けられたとしても、死ぬ覚悟だけはしておかなければなりません。

医師は最後の検査をする決断を下しました。それは髄液に空気を注入するというひどく苦痛を伴うものでした。この検査をすることにより種瘍の正確な位置がわかり、コバルト照射を施す手助けとなります。検査の前に私は素晴らしい神権の祝福を受け、その中で退院することを約束されました。

検査の後で快復を待っている間、医師は驚いた様子で家族のそばにやって来ました。腫瘍が発見されなかったと言うのです。腫瘍のあった形跡は確かにあるのですが、その場所には何も無いのです。医師は説明に

窮しました。そして診断に誤りがあったことを認めました。

突然私は「寿命が延びる」ということがどういう意味か身を持って知りました。私は新しい生命をいただいたのです。結局私たち家族は、愛する天のお父様の寛大な心と知恵とによって今もこうして一緒にいるのです。私の寿命は延ばされました。17日間の入院生活を終え、私は歩くのさえやっとなりましたが、この上ない幸せに包まれて病院を後にしました。これも多くの信仰の厚い、素晴らしい方々の祈りのおかげであり、神権の祝福と力のおかげです。

体力が回復するにつれ、私の毎日は炊事や掃除、洗たくにおむつ替えといった世俗的な雑事にまた追われ始めました。しかし今まで以上に感謝と幸福感にあふれた毎日になりました。それに絶えずみたまを求めることの大切さ、子供たちに福音を心を込めて教えることの大切さ、またもっと充実した祈りができるように努力することの大切さを理解するようになりました。

私は今、主の私に対する信頼にふさわしい人生を送れるようにいつもお祈りしています。どれだけ生きられるかはだれにもわかりません。私は自分の人生の一瞬一瞬に最善を尽くして行きたいといつも思っています。

迷 う こ と な く



十二使徒定員会会員
ジェームズ・E・ファウスト

愛する兄弟姉妹、私は神の聖徒に会うたびに、心に喜びを覚えます。

私たちが属しているこの教会は、正直、高潔、高い道德水準を説くなど、様々な点で、今世界中にその名を知られるようになっています。教会は一個の団体として、今の代の標準、道德とは異なる原則を唱導し、それに従っています。

私たちも皆、一個の教会員として、それぞれに独自性を持ち、程度の差はあっても、教会の教えの中の何がしかを身をもって示しているのです。

すべての会員が教会の教える生き方を完全に、また臆することなく人々に宣言し、自らもそれに従っていくことの必要性和重要性について話したいと思います。

どちらの側にもつこうとしない、あいまいな態度をとる人に対して、黙示録の中で次のような強い警告がなされています。

「わたしはあなたのわざを知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであってほしい。

このように、熱くもなく、冷たくもなく、なまぬるいので、あなたを口から吐き出そう。」(黙示 3 : 15—16)

自分なりにこれと話そうと考えていたことがあったのですが、私自身の実際の体験を話すようにと勧められておりますので、恐縮ながら少々私事を述べさせていただきます。その体験から私が得た教訓が、少しでも皆さんの助けになれば幸いです。

1942年、あの重大な戦局の折、私はアメリカ空軍の一兵卒として軍務に就いていました。場所はイリノイ州のチャヌート・フ

ィールド、ある寒い晩、私は不寝番に立っていました。寒さと眠気と闘って持ち場を回りながら頭の中で考えたのは、そんな務めの惨めさばかりでした。そして朝が来た時、私は胸の内に幾つか固い決心をしていました。

当時私は婚約をしていましたが、ひと月に50ドルという軍隊の給料では、結婚はできない相談でした。それで、将校にならないかと思っただけです。不寝番の務めが明けて1日か2日の内に、私は士官学校への入学願書を提出しました。しばらくたって口頭試問の日が来ました。私は他の幾人かと一緒に召喚され、資格適性審査を受けることになりました。私は大学で2年を送った後、南アメリカで伝道をしていましたが、資格適性審査と言われても、取り立てて挙げることのできるものはほとんどありませんでした。22歳という若さと健康な肉体、私にあるのはそれくらいのものでしたが、入学願書に教会の宣教師としての務めを記入できたのは嬉しいことでした。

いざ試問となって、私は自分に向けられた様々な質問に驚きました。質問のほとんどが私の伝道生活という点に集中したのです。「タバコは吸わないのか?」「酒は?」「酒やタバコをやる他の者についてはどう思うか?」これらの質問に答えるのは、別にどうということもありませんでした。

「君は祈りをするのか?」「将校も祈るべきだと思うか?」という質問をした審査官は、いかにも百戦練磨という感じの将校でした。彼はとても、よくお祈りをする人には見えませんでした。私は考えました。「自分が本当に思っていることを言ったら、彼の

気分を損じないだろうか? 差し障りのないところで、祈るかどうかは個々人の問題であるという返事ならどうだろうか?」私は何としても将校になりたいと思っていました。不番番や炊事当番などの惨めさもさりながら、とにかく、結婚できるだけの経済的な裏付けが欲しかったのです。

しかし、私はあいまいに言葉を濁すことはしまいと決め、自分は祈りをするということ、また将校たちも過去の偉大な将軍たちと同じように、神の導きを求める方が良いと思うと答えました。それから、将官は想定できる様々な事態に備え、祈ることも含めて、部下をその時々に応じた適切な行動がとれるように導く必要があるとつけ足したのです。

そしてさらに興味深い質問がいろいろと出てきました。「戦時下においては道徳律の弛緩^{しな}もやむを得ないと思うが、どうか?」ひとりの上級将校が言いました。「通常の状況下で家庭の中では許容されない行動でも、戦闘という緊張した状態では許容されてもいいと思うが、その点について君はどう考えるか?」

ここでも、しようと思えば、あいまいな言葉を使って、点数を稼ぎ、偏狭な精神の持ち主でないということを示すことはできました。私は純潔の律法を人から教えられると共に、自分も人に教え、守ってきましたが、審査官たちがこの標準に即した生活をしていないことはよく承知していました。「さあ、将校になれるかどうか、これが最後のチャンスだ。」道徳律に関して自分は自分なりの信念を持っているが、それをあえて他の人に押し付けようとは思わない、と



道徳に関して
二重の標準は
あり得ないと
思います。



答えたとしても、信仰に背くことにはならないだろうという考えがふっと頭をかすめました。その時、自分が宣教師として純潔の律法を教えた多くの人々の顔が次々と浮かんできました。聖典が私通や姦通についてどう教えているか、私はよく心得ていました。

返答をそれ以上延ばすことはできませんでした。そして、「道徳に関して二重の標準はあり得ないと思います」と答えたのです。

それからまた、世に宣言している信仰に忠実な生活をしようと努めているかなどという点について、幾つか質問があったと思います。私は自分の答えが審査官たちの気に染まず、評価も間違いなく低いだろうと思いましたが、それはそれでどうしようもないとあきらめることにしました。数日後、結果の発表があり、それを見た私はびっくりしてしまいました。私の名前の横には、なんと“評点95”と書かれていたのです。私は士官候補生の中の上位グループに入れられ、入学に先立って伍長に昇進することになりました。卒業時には少尉に任ぜられ、

結婚もして、今まで幸せな生活を続けてきています。

この口頭試問は私にとって、人生の最も重大な岐路に立たされた時でした。信仰を貫き、自己の本当の姿を見つめ、皆さんと同じように、自分自身の立場を明らかにしなければならぬことが、これまで何度もありましたが、まさしくそのような時だったのです。このような経験がすべて望ましい結果で終わったわけではありません。しかしこうした体験は、いつも私の信仰を強め、たとえ予期せぬ結果が現われたにしても、それに適応していく力を与えてくれました。

私はこの口頭試問を初め、様々な経験から、たとえ相手が自分の信仰を受け入れてくれず、冷淡な態度を示すようであっても、自分の信念をはっきりと宣言するなら、彼らも私たちに敬意を払ってくれることを学びました。

傍観者的な態度をとる人がいます。真理への確信はあるのですが、社会、家族、また経済的、政治的な事柄への配慮が先に立ってしまって、真理に固くつけないでいるのです。フェストから「博学がお前を狂わせている」（使徒26：24）と非難された時、パウロとアグリッパの間に次のようなやりとりがなされました。

「王はこれらのことをよく知っておられるので、王に対しても、率直に申しあげているのです。それは片すみで行われたのではないのですから、一つとして、王が見逃されたことはないと思います。

アグリッパ王よ、あなたは預言者を信じますか。信じておられると思います。」

アグリッパがパウロに（聖典の中で最も悲しむべき言葉を）語った。『おまえはもう少しでわたしをクリスチャンにしようとしている。』（欽定訳使徒26：26—28）

「もう少しで」「大体、ほとんど」。こうした言葉は何と悲しい響きを持っていることでしょう。善良な教会員のほとんどは知恵の言葉を守り、神権会や聖餐会に出席し、家庭の夕べを開いています。什分の一も、完全にではなく、大体納めている人がいます。

信仰は持っているものの、社会的な圧迫の故に自分が信者であることを人々に知られるのを恐れるという人は、救い主の時代から存在してきました。ヨハネは社会的な対面を恐れた役人たちについてこう書いています。

「しかし、役人たちの中にも、イエスを信じた者が多かったが、パリサイ人ははばかって、告白はしなかった。会堂から追い出されるのを恐れていたのである。

彼らは神のほまれよりも、人のほまれを好んだからである。」（ヨハネ12：42—43）

パウロがコリント人に宛てた手紙にはこうあります。

「だから愛する兄弟たちよ。堅く立って動かされず、いつも全力を注いで主のわざに励みなさい。主にあっては、あなたがたの労苦がむだになることはない、あなたがたは知っているからである。」（Iコリント15：58）

何カ月か前、私は妻と一緒に、ノッチンガム・イングランドステーク部のリチャード・リチャードソン監督の奥さん、フェイ・リチャードソン姉妹の証を聞く機会に恵ま

れました。リチャードソン姉妹の許しを得ておりますので、その時の話を少し引用させていただきますと思います。

「大分昔のことですが、学校で宗教に関する授業の時、私は自分の証ははっきり表明しなくてはならないということを学びました。14歳の時でした。教師は生徒全員にどの教会の会員かを尋ねた後で、こう質問しました。『皆さんの中で、神の存在を信じている人はどのくらいいますか？』

私は体が熱くなり、顔が赤くなるのを覚え、心の中でつぶやきました。『どうしたの！今こそ自分が信じてることを証しなくちゃならない時なのに。』私は直観的に思いました。皆人間の学問に染められ過ぎて、神を信じているような人はひとりもいないし、手を挙げる人もいないと。でも、私は静かに手を挙げました。そしておずおずとした様子で、クラス中の視線を一身に浴びながら、こう言ったのです。『私は、神は実在するのではないかと思っています。』

なぜあんなことを言ったのかと、私はひどく後悔しました。はっきりと証することもできたはずなのに、あいまいなことを言ってしまったのです。私はそれからというもの、あの時のクラスで堂々と立ち上がり、神が生きたもうと強い証をする自分の姿をよく夢見ました。もう一度あの時の状況が再現され、神に対する心からの愛を話すことができたらと、何度思ったか知りません。しかし幸いに、私はその時の出来事から教訓を得、福音に関する話し合いの場で、あいまいな言動をすることは以来一度もありませんでした。』

リチャードソン姉妹はさらにこう続けま

した。「ある時、ノッチングムの公立図書館の一角で、『モルモンに関する事実と幻想』という映画が上映されることになりました。夫は職場からまっすぐに図書館に向かいました。私もどうしてもその映画を見たいと思い、3人の子供を連れてバスで行きました。

上映予定の30分ほど前になって、ある人から、『どなたか町に出て、この映画の宣伝用のパンフレットを配っていただけませんか』との呼びかけがあった時、私はそれこそ自分のなすべき仕事であると思いました。その時、心の中に、『でも、本当は行きたくないんでしょう？ 見ず知らずの人に話しかけるなんて、できっこないわ』という声があったのですが、私は『その通り、本当はそうなの、でも私はやるわ！』と自分に言い聞かせました。

心の中で言い争うふたつの声を聞きながら、私は立ち上がりました。そして視線を下に向けると、そこには、まじまじと私を見つめる、かけがえのない3人の子供の目がありました。『もしここで、信仰を行ないで示さなかったとしたら、私は子供たちにとってどんな母親になってしまうだろうか』と考えました。私たちは多くの時間を使って子供に福音を教えてきました。そして、もし教えたことを自ら実践しないとしたら、自分でそれを打ち崩してしまうことになるのです。私のなすべきことは決まっています。

私たちはパンフレットを受け取り、小さな長女にサンドイッチマンがつけるような広告板を体の前と後につり下げさせてから、一緒に町に出て行きました。パンフレット



たとえ相手が自分の信仰を受け入れてくれなくても、
自分の信念を
はつきりと宣言するなら、
彼らも私たちに
敬意を払ってくれることを
学びました。



を配っても、果たして映画を見に来てくれる人がいるかどうかはわかりませんでした。でも、自分たちの責任を果たすと共に、伝道が、時々家庭の夕べで話し合うだけにとどまるものではないことを教える機会に恵まれたのはとても幸せでした。」

聖徒は什分の一や捧げ物を納めることによって、自分の信仰を明らかにし、さらには祝福を受けることができます。また、お金や物の管理法を覚え、納めた残りの分をより賢明に用いることができるようになります。そして信仰が強められていくのです。

まだ若い時分、監督に召された時のことです。私は最初にワード部会員の什分の一の記録簿を見て非常に驚きました。私はそのワード部の中で育ち、多くの会員から福音を学び、すべての人を友としていたのです。ずっと教えてくれた彼らは、私にとっては英雄でした。私は彼らを愛し、彼らも

私を愛してくれていました。ですから、断食日に皆の前に立って、神と地上におけるそのみ業に対して不動の信仰を述べた人が、什分の一となるとそれをぐらつかせてしまっている状態を知った時は大変なショックでした。

罪の中へ逆戻りし、つまづく人が大勢いますが、私は福音の中には2度目のチャンスがあると信じています。福音の中の2度目のチャンスとは、救い主を知らないと言った時のペテロのように、ひとたび自分の弱さに気がつけば、後はニーフай第三書に「信仰堅固で少しも動かず、喜んで全く熱心に主の命令を守ったから決して教会を去らなかった」(Ⅲニーフай6:14)と書かれているレーマン人のようになれるということなのです。

自分の本当の姿というものは、幾ら隠そうとしても、隠し切れるものではありません。内面からにじみ出てくるのですから、すぐに見抜かれてしまいます。欺こうとしても、自分を欺くだけのことです。私たちは、実は何も着ていないのに、美しい衣服で盛装していると思込まされた、あのおとぎ話の王様のようなものです。

信仰堅固で少しも動じることのない人は、その内に、目には見えない大きな力を秘めています。さらに、強い靈的な力を豊かに与えられていくことでしょう。

最後に、私たちが携わっている、この神聖な業が真実のものであることに関して、私の心からの確信を申し上げたいと思います。この教会を導かれる、頭なる御方は、私たちの主、救い主、イエス・キリストです。主はこのみ業をスペンサー・W・キン

ボール大管長を通して導いておられます。キンボール大管長は、今地上における神の王国のもろもろの働きを指導しています。

この教会は主の教会であり、主のみ業と栄光は、主御自身の導きの下に、この世界の多くの国々に広がりつつあります。

この神聖な働きが神の命によるものであることを、イエス・キリストのみ名によって証します。アーメン。

(1979年8月25日、カナダ地域大会における説教)

話し合いのために

個人または家族でこの説教を読んでから、福音の学習の時間に、以下の事柄について家族と話し合うとよい。

1. この説教の中では、中途半端な信仰の人々に対する主の警告が取り上げられているが、証を強めるためにはどのようなことを行なえばよいだろうか。
2. この説教の中では、信仰の試金石の例として、知恵の言葉や純潔の律法に対する従順が説かれている。では、同じように私たちの信仰の試金石となる教えにはどのようなものがあるだろうか。
3. 成功したり、幸せになったりするためには、世の人がしていることをしなければならぬのだろうか。
4. 主の教えに対する忠実さのゆえに、人から遠避けられた場合、どのように対処すべきだろうか。真理に忠実な者に与えられる主の報いはどのようなものか。

最後の転任

ポール・ジェームズ・トスカーノ

伝道地で最後の転任通知を受け取ったあの日のことは生涯忘れないでしょう。転任があるのはわかっていました。伝道部長自身が宣教師の配置転換をそれとなくほのめかしていたのです。それで私は、伝道生活最後の6カ月は、おそらく巡回宣教師としての任務が与えられるのではないかと想像していました。そうなった時のことを考えると心が浮き浮きました。

転任通知が届くや、私は封を切るのももどかしく、中の通知書を取り出しました。新しい責任に関する詳細な指示を探して、それにざっと目を通した私は、がっくりし





てしまいました。私が期待していた召しではなかったのです。

私はまったく平常心を無くし、腹の底には、何かわけのわからない痛みのようなものが起きてきました。注意深く、もう一度その通知書を読み直してみました。しかし、書いてあることは同じでした。私の伝道は、北イタリアのティレニア海に面したジェノバの町で、先輩宣教師として幕を閉じることになったのです。書いてあったのはそれだけでした。

同僚に自分のひどい落胆を悟られまいと一生懸命装ったつもりでしたが、彼は私に何か普通でないことが起こったと感じたようでした。

玉石を敷き詰めた春の日のフローレンスの通りは、雲間からもれる午後の陽光で照り映え、ひしめき合う赤茶けた建物のあちこちの窓には、色とりどりの花を植えた陶製の鉢が見えました。

何も言わずに青空市場の方へ向かって歩く私と同僚の靴音が、その細い路地にコツコツと響いていました。市場は新鮮な野菜や熟した果物を大事そうに抱える主婦たちであふれ、チーズやソーセージの鼻をつく強い臭いでむんむんしていました。糸、リボン、色鮮やかな織物、亜麻布、緞子、羊毛地のキルト、レース、強烈な臭いの皮製品、

木製のアイコン、タバストリー、絵、大理石の彫刻、ペニス製の見事なガラス器など、ありとあらゆる物が屋台店一杯、所狭しと並べられ、大きな声で値切り交渉をする買物客や売り物の間をせわしげに動き回る売手のざわめきで活気が充満していました。私たちは人ごみを避けて、アルノ川という、泥水の流れる川に架けられた古い橋の近くを歩きました。そこで私は、期待していた責任が与えられなくて非常に落胆したこと、先輩宣教師、監督長老として最善を尽くしてきたこと、時には、これ以上は耐えられないというところまで、歴史や記録の係として伝道本部で報いのない仕事に多くの時間を過ごしてきたこと、また、良い宣教師となるためにどれだけ頑張ったか、伝道生活最後の数カ月を巡回宣教師ではなく、先輩宣教師として終えることになって、どれほどがっかりしているかを同僚に話しました。

私の話が終わって、ふたりは歩みを止めたましたが、同僚が口を切って言ったのは、「大切なのはどういう責任かではなくて、どう責任を果たすかでしょう」という、絶対に聞きたくないと思っていた言葉、そして、何度も自分に言い聞かせていた言葉でした。

私は今にも泣き出さんばかりでした。同



僚が言ったことは私にもわかっていましたし、教会員としての生活の中で何度も聞かされ、心から信じてきたことでもありました。それなのに、巡回宣教師になりたいという思いからまだ逃れられないでいたのです。自分の心の奥深くに手を伸ばし、その思いを根こそぎにしたいと何度思ったか知れません。でも、どうしてもできなかったのです。そんな気持ちを心の中から追い出したいと祈り、あるいは、そんな気持ちは初めからなかったのだと自分に言い聞かせ、その気持ちと戦いもしました。しかし、それを追い出すこともできませんでしたし、自分を偽ることもできませんでした。現実を直視しなければならなかったのです。してきたこと自体に間違いはありませんでしたが、動機が誤っていたのです。

かつて経験したことのない深い失意を味わった時、自分が何の価値もない、見下げ果てた人間のように思え、不純な動機と思いが心の中に巣食っていくようになりました。自分の人生は偽りだったのではないかと思え、生きているのがいやになりました。

今にして思えば、私はあの時、神に助けを求め、思いのたけを尽くして祈っていたのです。どうして私は与えられているものに満足できないのでしょうか？ 指導者になりたいという気持ちがこんなにも強いのは

なぜなのでしょう？ 何ひとつ間違いのなかった伝道生活を、なぜこんなことで台無しにしなければならないのでしょうか？ 自分が本当に求めていたのは何だったのでしょうか？ 喜びを感じるためにはどうしたらよいのでしょうか？ 主よ私のどこが悪かったのでしょうか？ 何が必要なのでしょうか？ 何をしなければならぬのでしょうか？ どこに安らぎがあるのでしょうか？

何もかもが最悪の状態に見え、もうこれ以上、この苦しみに耐えることはできないと思った時、不意に心に強くささやきかけてくるものがありました。闇の中に突然光が現われたようでした。

自分のものではない、何かはるかに高貴な存在が語りかけてくるような感じでした。「あなたが本当に必要としているのは、自分がキリストの意にかなうものであるという示しです。教会の召しはその示しとなることはありません。真の示しは聖霊によるものです。」

少しの間、私はこの世の救い主の名前以外、何も思うことができませんでした。頭の中にあるのは、救い主の名前だけでした。そして、言うに言われぬ喜びと安らぎが心を満たしたのです。

理解の目が開かれていきました。私が他



の何にも増して必要としていたのは、自分は価値ある存在であり、救い主に受け入れられ、主の愛と信頼を受けているという気持ちだったのです。私は、自分が価値ある存在であり、伝道部長、教会、そして特に主の意にかなう者であるという示しを、教会の召しの中に求めていました。私は大切な原則を忘れていたのです。主に受け入れられたことの示しとして与えられるのは、指導的な責任ではなく、聖霊、すなわち、みたまの力、実、賜なのです。

フローレンスのあの古い橋の上で、理解の目を開かれなかったとしたら、私は教会でより高い召しを追い求め、失意と悲しみをさらに深くしていったに違いありません。おかしな言い方も知れませんが、本当に必要でないものを、十分に得ることは絶対にできません。なぜなら、必要がないもので満足することは絶対にできないからです。代用物から本物のもたらす満足感を得ることはできないのです。

私は、教会の召しを、みたま、愛、イエス・キリストに受け入れられているという気持ちの代用物にしようと思っていたのです。しかし、この最後の転任以来、いかなる教会の責任、この世的な力、学問上の誉れ、富、名声、スポーツの記録も、キリストと、キリストに受け入れられているとい

う確信に代えることはできないと思うようになりました。この確信は他の何よりも心に慰めを与えてくれます。

主は私たちから希望、夢、命、愛する者を取り去り、時間、才能、富、心、勢力、思い、体力を尽くすように求めることがあるかも知れません。しかし、それは主がそれらのものを欲し、必要としているからと言うわけではありません。私たちがそれらのものを主以上のものと考えたり、真の神の代わりに、口の利けない偶像、偽りの神神として礼拝したりしないようにするためなのです。

ほかのことはともかくとして、私にはたったひとつ確信できることがあります。私は他のどのような感覚よりも確かな聖霊の力によって、十字架につけられたナザレのイエスが死からよみがえられたことを知っています。主は再び地上に來られます。その時、「ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ」(Iコリント15:52)主を愛し、その現われを待ち望む人々は栄光の雲の中に主の姿を見、勝利の内に空中高く上げられ、主にまみえるのです。

その日私たちは皆、今は理解できない方法によって、何をもってしても、イエス・キリスト、すなわち主に取って代えることはできないことを理解するのです。

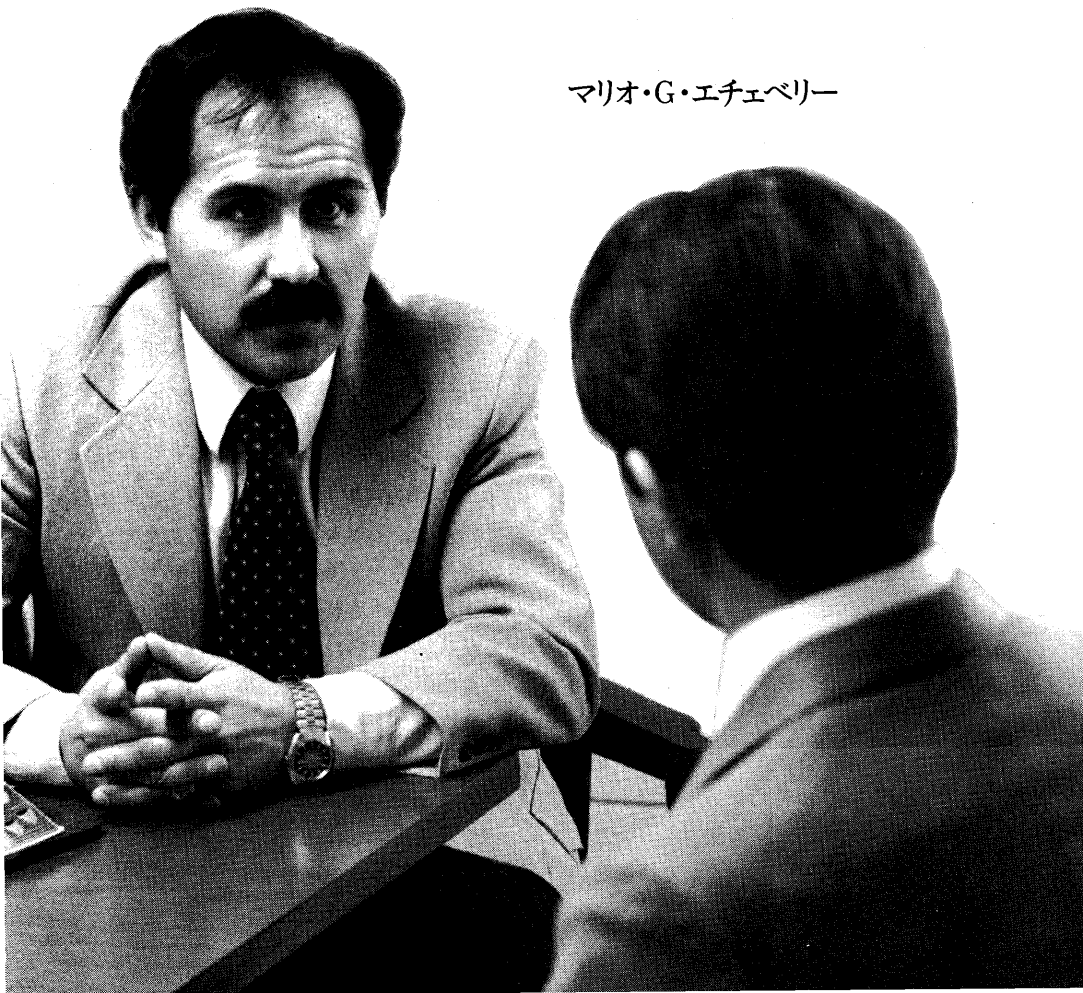
私は東コロンビアにある小さな町の出
身です。私はそこで教会について学
び、バプテスマを受けました。また伝道に
出たいと思うようにもなりました。家族の
中でこの福音を受け入れたのは、私ひとり
だけでした。

私は宣教師の手伝いをするために、また
同時に伝道の経験を積むために、ほとんど毎

晩宣教師と出歩いたものでした。彼らから
どこへ伝道に召されたいか尋ねられた時の
私の答えはこうでした。「ベネズエラ以外な
らどこだっていいんです。」それというのも、
その頃は私たちの国とベネズエラの間に緊
張が高まっていたので、私はベネズエラの
人々に対しては、愛も理解も持ち合わせて
いなかったのです。

ベネズエラ以外なら

マリオ・G・エチェベリー



時が過ぎ去り、私は伝道部長の面接を受けることになりました。その中で彼はひとつの質問をしました。「兄弟、あなたは主が召される所ならどこへでも行って下さいますか。」

私は即座に「もちろんです。伝道部長」と答えました。

すると彼は身を乗り出し、私の目を見つめて言いました。「もし主があなたをベネズエラへ召されたとしてもですか。」私はその時伝道部長が私の気持ちを知っていたことに気づきました。一呼吸して、何とか「主が召されるのなら行きます」と口では言えましたが、心の中には、依然としてベネズエラの人々に対するわだかまりが残っていました。

ついに白い大きな封筒に入った伝道の召しを、郵便配達が運んで来る日がやってきました。中を開いてみると、私はやはりベネズエラ伝道部へ召されていました。その夜私はひざまずき、ベネズエラへ遣らなほしいと主にお祈りしました。しばらくの間主に事情をお話した後、私はあなたの助けが必要なのだと訴えたのです。私は立ち上がって電気をつけ、教義と聖約のページをめくり始めました。私の手は53章で止まりました。そこには主からの答えがあったのです。

「見よ、……われ汝の祈りを聞けり。而して汝は……汝の召……に就きて、主なる汝の神によりて知らんことを求めたり。汝、長老となるわが聖任を引き受けてわが言に従い、信仰と悔改めと罪の赦しとまた按手によりて聖霊を受くることを説くべし。また汝は……監督の任命する地に於てこの

教会の代理人となるべし。重ねて言う、わが願うは終りまで忍ぶ者のみ救われるを汝の知らんことなり。」(教義と聖約53：1，3—4，7)

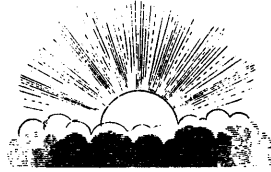
本を閉じてもう一度ひざまずくと、謙遜な気持ちがわき起こってきました。涙がほおを伝い、私は主のみこころに異議を唱えたことについて赦しを請いました。

ワイシャツとネクタイに身をつつんだ私は、ベネズエラへ行く覚悟をすっかり決めていました。私は救いを必要としている大勢の人々に会いました。今度は、彼らの味方として、この世の悪と戦わねばなりません。そして私は、ベネズエラの人々を全霊を尽くして愛するようになりました。彼らの中にはきょう神殿に入った人もいれば、教会の指導者となっている人もいます。宣教師になっている人さえいます。

私はベネズエラの人々から計り知れない愛を受け、また心を満たすことができました。そしてなぜ私がこの主のぶどう園の一部に遣わされたかがだんだんわかってきたのです。伝道の召しを解任された後間もなく、一番大きな祝福がやってきました。私の母がバプテスマの水に入るのを見ることができたのです。私は人々を主の王国に導く者に主が約束された喜びを知りました。また主の導きによって、伝道はイエス・キリストのみ業であることがわかりました。福音の訪れを待っている何百万人もの人々に回復のメッセージを伝えるのは、私たちに課せられた責任です。そしてこの責任を果たす一番良い方法は、フルタイムの宣教師として主が私たちをどこへ召されようと雄雄しくその召しに応えることだと思えます。

今日という日

七十人第一定員会会員 アレク・A・カズバート



我が家の娘ヘイゼルの部屋には1枚のポスターが張ってあります。そこには「今日という日は、残された人生の第1日」という簡単かつ重要なメッセージが書かれています。当たり前のことにも思えますが、福音に照らして考えてみると、奥深い内容を持っているのがわかるでしょう。

今日という日は私たちの生活の過去と未来の重大な分岐点です。もし過去の生活が主のみこころと一致したものでなかったとしても、罪を悔い改め、今は新たな人間となっているなら、主は私たちの過去の行ないを記憶にとどめることはないでしょう。反対に、過去にいくら神権者としての働き、情け深い行ない、伝道などをしていたとしても、今主に忠実でなければ、それらは何の益にもなりません。

私たちが実際にどちらの側に付くかは、思い、言葉、行ない、志において、自分自身を今どのように保っているかによって決まるのです。主は古代と末日の予言者の双方に、この点を絶えず強調されました。主はエゼキエルを通してこう宣言されました。「義人の義は、彼が罪を犯す時には、彼を救わない。……」

悪人がその悪を離れて、公道と正義とを

行なうならば、彼はこれによって生きる。」
(エゼキエル33：12、19)さらに時代を下ると、予言者ジョセフ・スミスを通して次のような約束が与えられています。「見よ、およそすでにその罪を悔い改めたる者は赦され、主なるわれもはやこれを忘るべし。」
(教義と聖約58：42)

悔い改め、変化、霊的な目覚めが今こそ必要なのです。作為、不作為の別は問わず、私たちは皆罪を犯しているのではないのでしょうか。皆天父の大きな期待に応えられないでいる有様なのではないのでしょうか。主が過去の行ないを忘れて下さり、新しく出直しができるということは、何と素晴らしい特権ではないのでしょうか。使徒パウロはエペソの聖徒たちに勧告して次のように言っています。「情欲に迷って滅び行く古き人を脱ぎ捨て、

心の深みまで新たにされて、

真の義と聖とをそなえた神にかたどって造られた新しき人を着るべきである。」

(エペソ4：22-24)

私は1975年に伝道部長の責任を与えられるまで、イギリスの実業界で多忙な毎日を送っていました。私の執務室は140ヘクタール以上の大工場の門を見下ろす位置にあ

りました。石油やセルロースなどの原料が貨車やトラックなどで次から次へと大工場に運ばれてくるところ、また、それからしばらくして、美しい織物や有益なプラスチック製品などが、倉庫、商店、家庭へと運び出されていく光景をよく目にしました。変化という奇跡が起こり、原材料が美しい製品に姿を変えたのでした。

私たちが皆この変化を体験しなければなりません。貴い原材料はすでに与えられているのです。ものを考える力、気概、行動力、才能、空間、時間などは、すべて私たちの管理に委ねられています。慈悲深い天父がこれらのものを私たちに与えて下さいましたが、それは私たちが土の中に埋めるためではありません。さらに磨き、5倍、10倍とするためなのです。私たちの生活の中から一体何が生まれてくるのでしょうか。これまでの私たちの変化の過程は、果たして十分なものだったのでしょうか。時間とエネルギーをもっと節約し、才能、英知、行動力をさらに実りのある方法で使い、今、この過程をより能率の高い効果的なものにしてはなりませんか。

ナイアガラ滝を何度か見たことがありますが、そのたびに驚かされるのは、1分間に130トン以上の水を約60メートルも落下させるこの瀑布が持つまだ未利用の大変な潜在エネルギーです。これが利用されるようになると、500万馬力のエネルギーが得られ、豊富な電力を人々に供給できるのです。私たちが皆、人々に祝福をもたらし、啓発し、自らも進歩成長して才能を伸ばし、生活を素晴らしいものとする同様の力を持っています。では、それを実現するための

鍵は何でしょうか。霊的な^が覚醒、変化、改善、障害の克服、新規巻き直し、歩みを速めること、今日をきのうよりも良い一日にすること、これらが鍵です。これらはどれをとっても、永遠の進歩に欠かすことのできないものです。にもかかわらず、私たちの多くは、霊的成長、クリスチャンにふさわしい特質を身につけるなどの点になると、幾分反応が鈍くなったり、目が覚め切れないようなところがあるのです。何かひとつの徳を身につけようという目標を設定した時でも、それを達成するための時間は幾らでもあるという風に考えてしまうのです。

緊張感、今それをするのだという気持ち、今日という時を大切にできる心が、もっと求められているのです。スコットランドで伝道の責任に就いていた時は特にそうでしたが、私は何年もの間、人々にひとつの質問を繰り返してきました。「もし今日までしか生きられないとしたら、どんなことをしますか。」求道者か古くからの会員か、また老若の違いなどを超えて、私たちはこの質問について考えなければなりません。そうすると次のような疑問が湧いてくるでしょう。「私が本当にしなければならないのは何だろうか。天父は私に何を望んでおられるのだろうか。私にとって最も価値あることは何だろうか。」優先順位を定めた生活をすることは、とても大切なことです。「現世は、人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。……

……後から夜のような暗やみの生涯がやってきてそこへ入ったら何の働きもできるはずがない。」(アルマ34:32-33) 時間はどんどんなくなっていくます。

この20年の間に声を大にして叫ばれてきた中のひとつに、天然資源を大切に利用しようということがあります。なすべき様々な事柄に優先順位をつけていくなら、その大きな利益のひとつとして、時間という乏しい原材料を節約して用いることができるようになるでしょう。毎日の初めに、その日の内に果たすべき10の事柄を書き出して表にしておくのは良い方法です。これとあわせて、時間を厳守し、信頼される人間になるべく努力するなら、時間の浪費を少なくし、いらだつ気持ちをかなり解消できるようになるでしょう。

18年前、新任のステーキ部長として初めて総大会に出席した折、私は時間の厳守という点に関して価値ある教訓を得ました。私は様々な部門に分かれて教会の業務を進める組織をひと通り訪問してみたいと考えていました。当時、教会の各部門はソルトレーク・シティの各所に広く散在していました。中でも一番の願いは、デビッド・O・マッケイ大管長に面会することでした。予言者と5分間面会できるか問い合わせたところ、午後1時半に待っているという返事をもらいました。私はこの素晴らしい特権にもう有頂天でした。その日の午前中、各部門を訪問して回りながらも、私の心は喜び躍っていました。そして時間はどんどん過ぎていきました。

何気なく時計に目をやった私はびっくりしてしまいました。時計の針が約束の刻限ぎりぎりのところを指していたのです。教会本部ビル目指してもすごい勢いで走りました。着いた時には顔は真っ赤で息も絶

え絶えでした。「1分遅れていたら、大管長に会う機会を逃していたかも知れませんが」と言われた時の私の気持ちを考えてみて下さい。幸いその後、マッケイ大管長に会うことはできたものの、この時の言葉は今でも私の耳の奥に残っています。

私は時々、生まれ故郷のイギリスのノッチングムにあった、ある教会の時計を思い出すことがあります。その時計には太い字で「今こそ主を求める時」という勧告が書かれていました。子供たちはこの時計を見ながら、針がベッドに入る時間を絶対に指さないようにと願いました。若者たちは楽しく過ごそうと外に行きながら、つまらない時を過ごしてしまうことがよくありました。それでも彼らには、時計の針のことでくよくよ考えるようなところはありませんでした。彼らの将来にはあり余る時間があったからです。少なくとも彼らはそう考えていました。人生の夕暮れ、老いの頃を迎えた人は、果たさないままになっている事柄をなすべき時はまだあると望みをかけています。実際、救い主の再臨の時は近づいており、私たちは皆、この世のたそがれ時にいるのです。

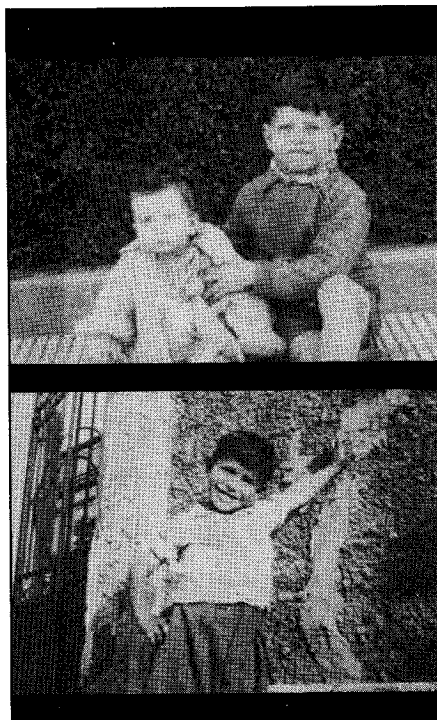
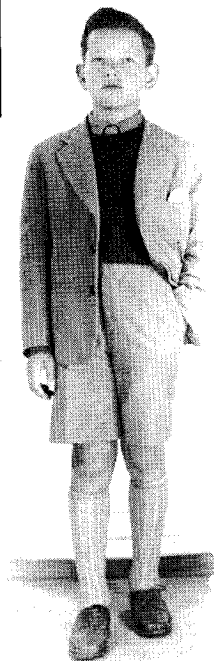
まさしく、今日という日は、残された人生の第1日です。しかし、もし最後の日だとしたらどうでしょうか、皆さんは何をしますか。

「日の照る間に働け
今日の義務をよく果たせ……
今日 今日つとめよ
今日あるのみ 明日は無し」

(讚美歌43番)



ちい とも 小さなお友だちへ



ジヨリーン・メレデ
イスによる七十人第
一定員会会員アンゲ
ル・アブレア長老へ
のインタビューより

わたしは10さいのとき、お母さんやお兄さんといっしょにバプテスマをうけて、教会に入りました。当時、わたしたち家族はアルゼンチンのブエノスアイレスにすんでいましたが、ある日のこと、ふたりの姉妹宣教師が父の店へやって来たのです。

父はミルクやチーズやバターを売

っていて、5、6頭立ての馬車をもっていました。わたしも時々、はいだつのお手伝いをしました。

教会に行つて、はじめてならつた「光となるように」という歌は、今でもおぼえています。わたしは、毎日その歌を歌っていました。父は、聞きあきてしまったそうです。

ある日のこと、わたしはおとく

さんのところへミルクを2本とどけに行きました。すると、その家のおばさんがわたしの歌う声を聞いて、こうたずねました。「何を歌っているの。」

わたしはこたえました。「光となるように、歌っているんだよ。」

「それは何？」

「教会の歌なの。」

「どこの教会？」

「末日聖徒イエス・キリスト教会さ。」

「へえ、あんまり聞かない名前ね。ほかにも名前があるんじゃないの。」

「うん。モルモン教会。」

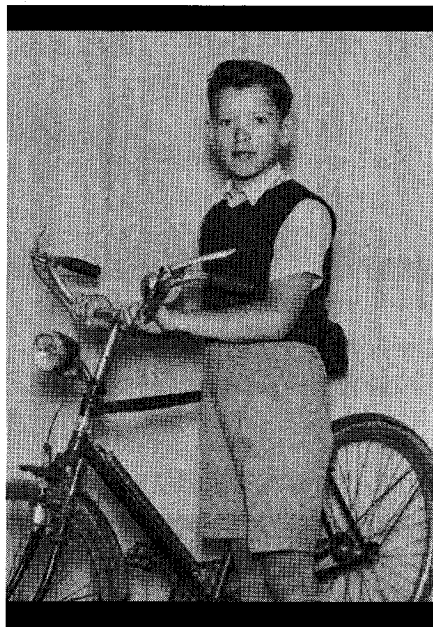
「その教会のこと、おばさんにも教えてくれない。」

記者：それから2週間ほどして、そのおばさんの家族は、モルモン教会につどいはじめたそうです。アプリア長老にとって、これがはじめての伝道のけいけんでした。

わたしのかいしゅうについては、^{はは}母にかんしゃしなければなりません。^{まつじつせい}末日聖徒の^{せんきやうし}宣教師たちは、わたしたち家族に読むようにと^{かぞく}いって、モルモンけいと、^{なん}何さつかのパンフレッ

トを^{はは}母に^て手わたしていったのです。わたしは、よく^{はは}母と^{いっしょ}にモルモンけいを読みました。宣教師たちは、わたしたちがわからないところを、たくさんせつめいしてくれました。わたしは、^{はは}母と^{いっしょ}にモルモンけいを^よ読むのが^{だい}大好きでした。^{はは}母は^{きやうかい}教会でとても^かかっぱつで、これまでもう25年^{ねん}も^{しやうきやうかい}初等協会^{おし}で^{おし}教えています。兄もとても^かかっぱつで、今は^{いま}ブエノスアイレスで^{かんとく}を^ししています。

記者：長老がよくおぼえていらっし



やる初等協会か日曜学校の先生の
ことを話していただきたいのですが。

わたしがバプテスマをうけたとき、
ブエノスアイレスには8人のととも
かつばつな姉妹がいました。教会中
のみみんなが、その姉妹たちのことを
よく知っていました。その中のふた
りは、わたしたち家族を教えてくれ
た宣教師で、もうふたりは初等協会
の先生で、のこりの人たちは日曜学
校の先生でした。ですから、みんな
わたしに何かしらを教えてくれた人
なのです。今でもわたしは、その姉
妹たちが教えてくれたことを、話し
たりします。

記者：お祈りについて、アブレア長
老はこう話していただきました。

わたしは、何回も何回も祈りのこ
たえをうけてきました。子供のころ
のことでは、11さいの時のことをよ
くおぼえています。父はいろいろな
こくもつも売っていたのですが、牛
や馬のえさになるように、すりつぶ
さなければなりません。ある
日のこと、父にはある責任があつて、
こくもつをぜんぶすりつぶすことが



できませんでした。わたしは、かわ
りにやっておいてあげるといいまし
た。父は、わたしがまだ子供だったの
で、できないだろうと思つたのです。

「お父さんつたら。まかしてとい
えよ。ぼく、できるよ。」わたしはいい
はりました。

とにかくも、父はわたしにさせて

くれました。ぜんぶすりつぶすには、4、5時間かかるのです。わたしは、こくもつをきかいに入れはじめました。何もかもうまくいきました。ところが、とつぜんきかいがはねあがってしまったのです。そのようなときは、きかいのある部分はずして、もう一どしめなおせばよいわけです。わたしは、きかいのその部分はずしたのですが、しめなおすことができませんでした。こんなことでは、お父さんをがっかりさせてしまうと、おもうて、わたしはなきだしました。

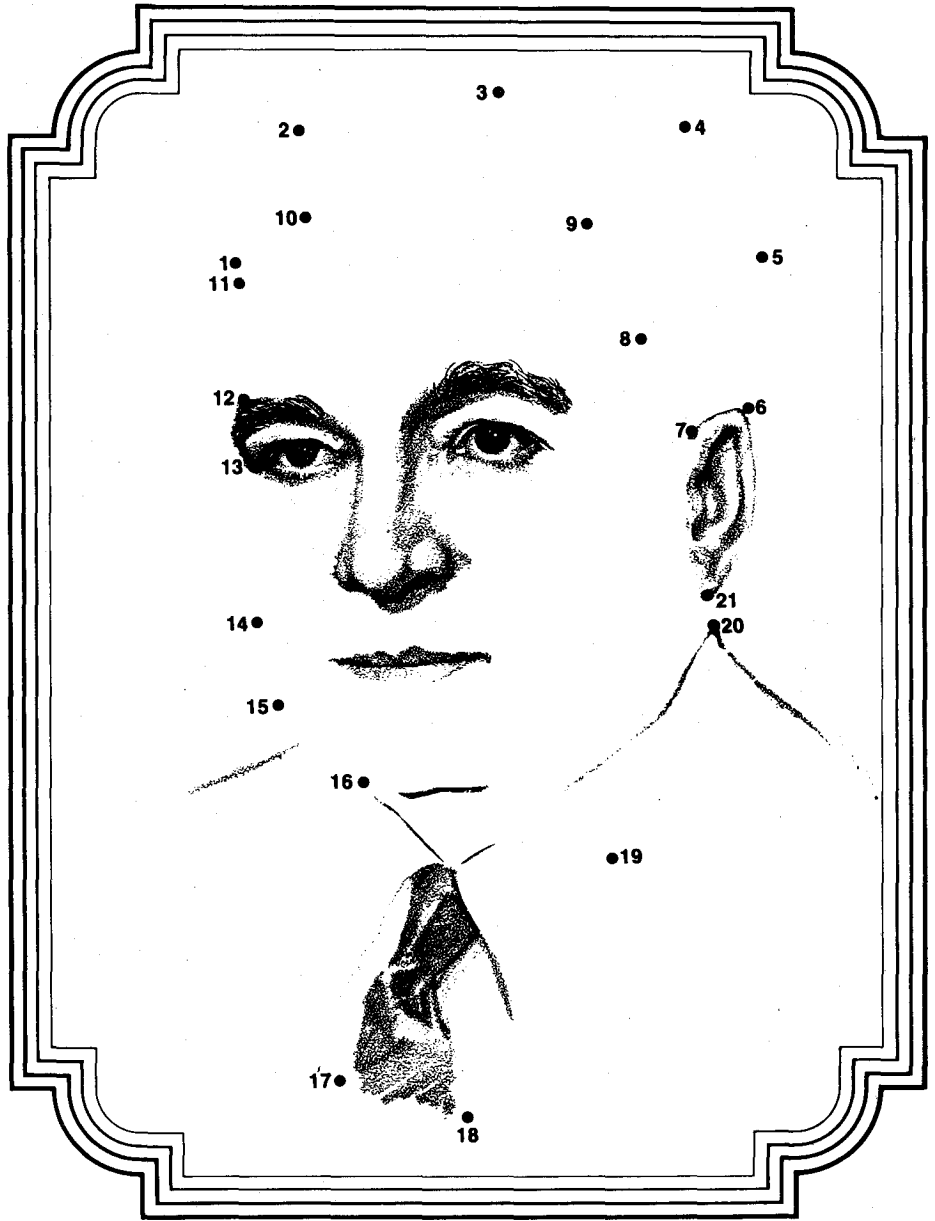
その時、わたしは教会員になって半年くらいでしたが、ふと初等協会のレッスンのことを思い出して、シクシクなきながら、ひざまずきました。その時のお祈りを、まだおぼえています。「お父様、たすけてください。イエス・キリストのみ名によって、アーメン。」そして、わたしはきかいのほうへ歩いていき、もう一どやってみました。すると、きかいはうごきはじめたのです。

その次のあかし会で、わたしははじめて人前であかしをしました。わたしはお祈りしたときにおこったことを、とつてもかんたんに話して、せきにつきました。わたしは、神様

がお祈りをきいてくださって、それにこたえてくださることを知っています。

わたしは、教会員になってから、アルゼンチンでいろいろなことがあこるのを見てきました。支部長をしていたとき、さいしよの教会堂がたちました。教会堂がたつと、ヒュー・B・ブラウン副管長がけんどうしました。今では、アルゼンチンには25のステーク部があり、8万人の会員がいます。神様がアルゼンチンと、そのほかすべての南アメリカの国々に福音がたつたわろようにされたのです。わたしが伝道部長をしていた3年のあいだに、伝道部内で1万2千人のがいしゅうしゃがありました。そしてまもなく、アルゼンチンに神殿がたちます。みんな、とてもかんしゃしています。ほんとうにゆめのようです。

未来のしどうしゃ、未来の宣教師である教会の子供たちに、少しお話したいと思ひます。今は、どうぞたのしくすごしてください。でも、未来のためのじゅんびもわすれないでください。みなさんはひとりのこらず、天のお父さまのたいせつなむすこ、むすめなのです。



ハロルド・ビー・リー 1899—1973



18 99年3月28日、ハロルド・ピ
ー・リー大管長はアイダホ州
クリフトンの小さな農場で生まれま
した。リー大管長は17さいのときに
学校の先生になり、18さいのときに
小さな小学校の校長になりました。
それからユタ大学をそつぎようし、
ユタ州ソルトレーク郡のふたつの小
学校の校長として、はたらきました。

リー大管長が勉強ずきになったの
は、お田さんが本を読むようにすす
めてくれたためでした。リー大管長
はこう語っています。

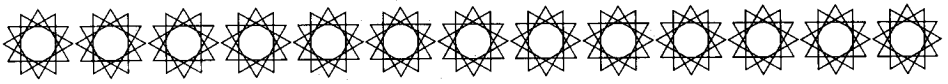
「わたしが生まれてはじめてもつ
た本は、ずいぶん大へんな目にあつ
て、手に入れたものなのです。村
のクリスマスパーティーのときのこ
とでした。クリスマスツリーについ
ていたろうそくの火がサンタクロー
スのふくに、もえうつつたのです。サ
ンタクロースはへやからとび出して

いってしまい、パーティーはあつと
いうまに、おしまいになってしまい
ました。

わたしは、プレゼントをもらえな
かったので、かなしいきもちになり
ながら、かたをおとして家にかえり
ました。でも次の日、やけあとの中
から、半分もえてしまつてはいまし
たが、わたしの名前を書いた本が出
てきたのです。

その本は、ある少年がよくはたら
き、正直であつたために人生におい
てせいこうしていくという物語でし
た。

わたしにとっては何かでせいこう
した人々の物語や伝記はおもしろく、
わたしの想像力をかきたててくれま
した。それに、いなかのきまりきつ
たせいかつを活気づけ、ふつうの男
の子ならだれでももつようなぼうけ
んにあこがれる気持ちをもんぞくさ



せてもくれたのです。

盆地^{ぼんち}の、山^{やま}のふもとでくらしていたわたしにとっては、野山^{のやま}のことや動物^{どうぶつ}たちのことを書いた物語^{ものがたり}も魅力^{みりょく}的^{てき}でした。

「^{だいかんちよう}リー大管長は、みたまの声をきくことも、お^{かあ}田さんからおそわつたと話^{はな}しています。

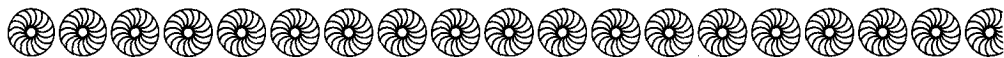
「あるときわたしは、わたしたち家族^{かぞく}の小さな家^{ちい}の戸口^{いえとぐち}に立^たって、近^{ちか}くの山々^{やまやま}に大^{おお}あらしがふきあれているのをながめていました。かみなりはだんだん近^{ちか}くになってきました。と、とつぜん、^{はは}田がものもいわずにわたしをつきとばしたのです。わたしは戸^との外^{そと}にひっくりかえりました。灰^{つぎ}のしゆんかん、いな光^{ひかり}がし、台所^{だいどころ}のかまどにかみなりがおちて、あいていた戸口^{とぐち}へぬけていきました。家^{いえ}の前^{まえ}にあった大木^{たいぼく}は一^{いつ}しゆんにして、てっぺんから根元^{ねもと}までさけてしまい

ました。

その一^{いつ}しゆんの決断^{けつだん}がわたしのいのちをすくうことになったわけですが、^{はは}田は、なぜそんなことをしたのかせつめいできませんでした。しかし、これは^{はは}田が^{はは}何^{なん}どもみたまのささやきにしがつたことの中^{なか}の、ほんの一^{いち}例^{れい}にすぎないのです。

「^{だいかんちよう}リー大管長は、この世^よに生まれてくる子供^{こども}たちには、^{かみさま}神様のたまもの^{はな}があたえられると話^{はな}しています。

「^{かみさま}神様は、これはキリスト^{ひかり}の光、すなわち真理^{しんり}の光^{ひかり}であると啓示^{けいじ}しておられます。このたまものは、^{ひと}人が^{かみさま}神様からくる真理^{しんり}と世^よの悪^{あく}をくべつできるように、どんな小さな子供^{こども}にもあたられます。わたしたちはだれでも、^{ただ}正しいこと、^{かみさま}神様のおっしゃることをしなければならぬのです。」



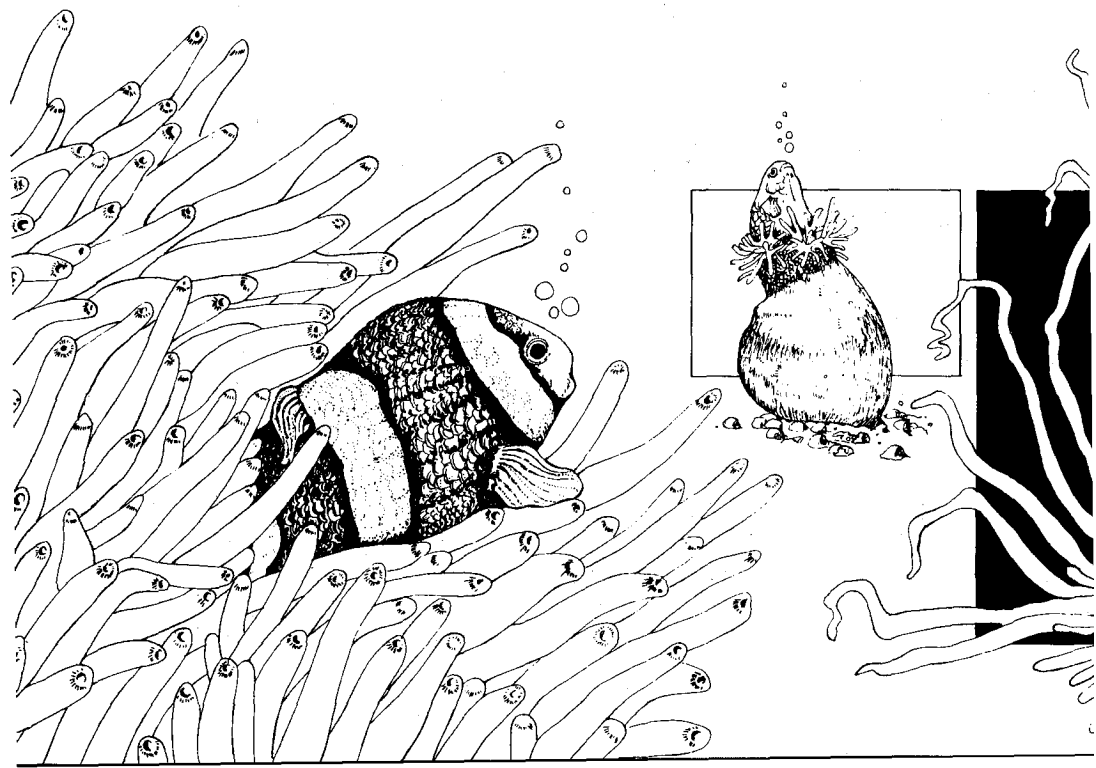
いそぎんちゃくのきわりた。



はなし
お話：シャーウッド・B・イツォー

インド洋からやってきたおどけた魚たちと、カリフォルニア湾産のイソギンチャクが、いっしょにうまく、くらしていけるでしょうか。わたしは、さつきとったばかりのアンピプリオン・ピシクタスが動

きまわるのを見ながら、考えました。アンピプリオン・ピシクタスは、1時間ほどポリぶくろに入れておいたのですが、水そうにはなしてやったのです。熱帯魚店の店員は、だいたいようぶですよといったのですが、





ウツボを7本足のタコの水そうに入れるときも、その店員は同じことをいったのです。

でも、イソギンチャクの水そうにアンピブリオン・ビシクタスを入れても、大してドラマチックなことはおこりませんでした。このおどけたシマモのような魚は、水そうの上のほうを数分間うろちょろしていましたが、ほかの魚はこのおどけもののようにすをうかがっていました。それが

ら、このおどけものは、2かいにもうけた、はば3メートルの水そうのはしからはしまで、およぎはじめました。この水そうの中には、メキシコのプエルトペナスコの少し南のカリフォルニア湾から集めてきた砂や、サンゴや、12種類のイソギンチャクが入っていました。あのおどけものは、どのイソギンチャクをえらぶでしょう。小さい赤っぽいのでしょうか。それとも、まん中にある大きなちや色とむらさき色のでしょうか。それとも、いくつかをかけもちする



- 左：一日中はたらきまわると、おどけものの魚は、自分がハヤを食べさせてやったイソギンチャクの中に入って、ゆっくりとやすみます。
- 中央：ハヤは、メキシコのカリフォルニア湾からとってきたイソギンチャクのえじきになります。
- 右：さあ、ハワイのイソギンチャクのおひるごはんの時間です。ハワイのイソギンチャクも、かわいそうなハヤを食べるのです。



つもりなのでしょうが。

アンピプリオン・ビシクタスは最初の一日一日中、あまりイソギンチャクに近づきませんでした。しかし、ふつか目のことです。アンピプリオン・ビシクタスは水そうの中ほどにいるイソギンチャクのそばに、自分のすまいを作っていたのです。そしてまもなく、あのおどけものは、新たに自分のものにしたイソギンチャクの触腕のあいだを、いきいきとうごきまわっていました。

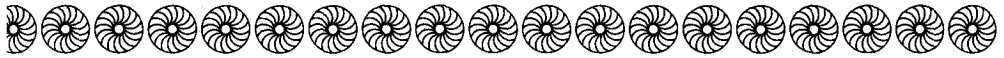
このアンピプリオン・ビシクタスとイソギンチャクの密接な関係は、共生を観察する人々にとって、何年かのあいだ論争のまとなってきました。アンピプリオン・ビシクタスは、イソギンチャクの触腕によりそって、てきからまもってもらっているのだと、研究者たちは考えていました。しかしそうだとすれば、イソギンチャクはこのおどけものから何をもらっているのでしょうか。

いろいろな時に、このおどけものはイソギンチャクに食物をあたえたり、ほかの魚をおびきよせてきて、

イソギンチャクの刺胞（どくのある触腕）につかまえさせたりするのではないかという考えもありました。しかし、このおどけものはイソギンチャクのところへ大きな食物のかたまりをはこんではくるのですが、それを食べさせはしないのです。それどころか、イソギンチャクが食物をつかむが早いかわそれをこまかく切りさいて、自分で食べてしまうのです。結局、イソギンチャクには何ものこりません。

どの考えが正しいのでしょうか。わたしたちは自分でたしかめることにしました。そして、とうとうたしかめたのです。

まず、てきとうな食物をあたえることからはじめました。近くの池にいけば、ま水にすむハヤがたくさんとれました。わたしたちは、ハヤを3びき水そうに入れました。するとすぐに魚たちがおひるごはんと、ハヤをひきちぎりはじめたので、水がはげしくなみうちました。その時です。どこからともなく、あのシマもようのおどけものが、すがたを現わ



し、魚^{さかな}たちがハヤをあさつておしあ
いへしあいしている所^{ところ}へ、とつしん
して、ハヤをひときれくわえると、
さつと身をひるがえしました。この
おどけものすばやい動き^{うごき}は、子供
がえものをもって、よるこんでかえ
ってきた時^{とき}のようすを思わせました。

そして、大きなちやいろ^{おお}とむらさき
色のイソギンチャクに近づきながら、
このおどけものは、ほんとうにハヤ
のきれはしをイソギンチャクの触腕^{しよくわん}
におしこんだのです。すると、イソ
ギンチャクはその刺激^{しげき}にこたえて、
えじきを食^たべようと、とじはじめま
した。イソギンチャクがハヤの肉^{にく}を
ちゃんとつかまえたことを見とどけ
ると、おどけものは、水^{すい}そうのはし
でおこっている、けんかさわぎの方^{ほう}へ
ともどつていきました。そして、も
う一度^{いちど}ハヤの肉^{にく}をひときれ手^てに入れ
ると、また、あのむくむくと、ふとつ
たイソギンチャクの方^{ほう}へともどつて
いったのです。二度目^{にどめ}にえさがまだ
触腕^{しよくわん}の中^{なか}にあるうちに、あのおどけ
ものが三度目^{さんどめ}のえさをもってかえつ
てくると、イソギンチャクはそれも

むさぼり食^くいました。

次^{つぎ}の日^ひも、わたしたちは本当^{ほんとう}の科
学^{がくしや}者のように、前^{まえ}の日^ひにおこったこ
とがまたおこるかどうか見^みにいきま
しました。やはり、また同じ^{おな}ことがおこ
りました。あのおどけものは、また
ハヤの肉^{にく}を3きれイソギンチャクの
所^{ところ}へもっていっただけではなく、お
く病^{びよう}なヘニオチャス(三角形^{さんかくけい}のヒラ
ヒラおよぐ魚^{さかな})がハヤの肉^{にく}をひとき
れイソギンチャクの触腕^{しよくわん}からぬすん
だときには、それをとりもどしてや
ったりもしたのです。自分^{じぶん}のハヤの
肉^{にく}のときは、とりもどそうとすらし
なかつたのです。

これで、あのシマもようのおどけ
ものと移植^{いしよく}したイソギンチャクにつ
いての疑問^{ぎもん}は解決^{かいけつ}されました。アン
ピプリオン・ビシクタスとカリフ
オルニア湾^{わん}からとつてきたイソギン
チャクは、本当^{ほんとう}にしあわせにくらし
ていて、たよりもよくおたがいのた
めにたすけあっています。毎日^{まいにち}、三
度の食^{しょく}事^じをはこんできてくれる友達^{ともだち}
について、あなただつたらどんなこ
とがいえますか。

日本の伝道史の中において、これまで幾人かの日本人伝道部長が召されてきましたが、先頃任を終えて帰還された4人の元伝道部長の証をここに掲載します。

こけしと伝道

—「神の資質」を彫り出す宣教師—



町田ステーキ部町田
第2ワード部、前仙
台伝道部伝道部長

坂井 圭

伝道部に入って数カ月たち、宣教師たちの顔と名前がようやく一致して思い浮かぶようになった頃、私は「一体何をしに、この東北へ来たのだろうか」と考えることがたびたびありました。「伝道しに来たのは確かだけれど、もし主がこの地においてになったら、果たして何とおっしゃるだろうか」と自問する日が続きましたが、ある時、モルモン経の次の聖句が強く心に浮かんできました。「雌鳥メドリがその雛ヒナを翼の下に集むるごとくに、われはこの後幾度いくばくにても汝らを集めん。」(Ⅲニーフアイ10：6)

主がこの地へおいでになったら、「雌鳥がその雛を翼の下に集めるように……」とおっしゃるのではないだろうかと感じるようになったのです。雌鳥が雛を集めるように伝道しようと考えていた時、ふと、以前「家庭の夕べ」で見たイラストを思い出しました。それはまさしく先の聖句をそのまま描

いたものでした。これをながめている内に、3つの部分があることに気付きました。

- それは、
1. 親鳥がいること、
 2. ひな鳥がいること、
 3. 巣があること、

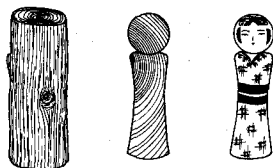


でした。そこで私は3つの目標をたてました。

1. 東北地方で、親鳥として教会員を守護して育てて下さる羊飼を捜し、育てよう。
2. 宣教師になったり、神殿結婚をされる若い人たちを捜し、未来を造るひな鳥を育てよう。
3. 皆さんが礼拝し、学び安らぎを得られる集会場という巣を提供しよう。

宣教師はまず親鳥となられる「お父さん」を捜すため、一軒一軒尋ね歩きました。しかし社会経験豊かで、すでに自分の人生観を築いておられる方々を導くことは、人間業ではできませんでした。「伝道部長、どうしたら良いのですか」とたびたび尋ねられました。私にもわかりませんでした。

「やはり無理なのか、お父さんたちの改宗は」と思い悩んでいた時、こけし作りを実演しているところに出会いました。こけし職人は、20センチメートル位の原木を機械で削り、見る間にこけしの形を作りました。それから筆をとり、鮮やかな手つきで模様、頭、顔を書き込んでいき、美しいこけしが出来上がるのです。また加工前の原木と、形はできていてもまだのっぺらぼうのこけしと、筆が入り立派に仕上がったこけしを見比べながら、私はひとつの木を見事に変えていったこけし職人の腕に感動しました。木でさえもこんなに価値が変わっ



てくるのなら、人はどうだろう。人は真理によって変わり、無限の価値を生み出すのではないだろうかと考え始めました。

この経験に心打たれた私は、原木と、のっぺらぼうのこけしと、完成したこけしの3つを分けてもらい、宣教師たちにも紹介しました。人はみんな「神の子」なのだから、人の中には必ず「神の資質」が隠されているはずだ。われわれ宣教師はそれを彫り出せば良いのだ。希望をもって、根気強く愛を注ぐなら、必ず「神の資質」が表われるはずだ。こけしは、いささか消極的になりかけた私たちを無言のうちに激励しているようでした。

モルモン経にはアンモンの素晴らしい伝道が記録されています。アンモンの根気強い働きによって、それまでラモーナイ王の中に隠されていた「神の資質」が表われてきます。「王の心から黒い幕のような無信仰がすでに離れ去って、その心を照す光、すなわち神の栄光の光、あるいはまた言いかえれば神の善徳の驚嘆すべき光は、ラモーナイ王自身に大きな幸福を注ぎ込み、暗やみの雲のような無信仰と無知とを散らして永遠の生命の光を王自身の中に輝かせたので……」（アルマ19：6）

詩人安積得也氏は、「未見の我」と題した作品の中で、「光明」という詩を発表しております。

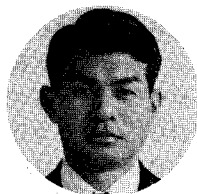
「自分の中に 自分の知らない自分がある
みんなの中に みんなの知らない

みんながある
みんなえらい みんな貴い
みんなみんな 天の秘蔵っ子」
私はこの詩が大好きです。

厳しい自然条件の中で生活される東北の方々は、純朴で忍耐強い方々でした。そしてみんなの中に、素晴らしい「神の資質」が、「神の可能性」が隠されていました。私は東北でそんな「天の秘蔵っ子」たちと、また四季を通じて「神生きたもう」と証する美しい自然を拝見させていただいたことに、深く感謝しています。この地にさらに神の栄光が現われますようにお祈りします。（さかい・きよし 1939年生まれ、町田ステークス部高等評議員代理）

主の懲しめを耐え忍ぶ

—ひとりの改宗がもたらすもの—



名古屋西ステークス部
名古屋第1ワード部、
前札幌云道部云道部長

堀田 徹

3 年の伝道生活の中で私は、数多くの人々が主の福音に改宗する姿を目にしました。苦しみを乗り越えてバプテスマにこぎつけた人と喜びの涙を共にしたこともあります。

キリストの教えを宣教師から学び、主の教会の会員になりたいと願ったひとりの奥さんがいます。彼女は最愛の夫から猛烈な反対を受け、雪の降りしきる北海道の厳寒

の夜、家を追い出され、扉に鍵をかけられました。でも彼女はくじけませんでした。耐え難い苦しみを乗り越えて、今はその御主人と共に、教会に集っています。「およそわが懲らしめを耐え忍ばずして、われを拒む者は聖くせらるるを得ず」(教義と聖約101:5) 聖めを受けるためには、どうしても主の懲らしめの門戸をくぐらなければならないようです。

教会員となったばかりの頃、私は「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう……。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。」(マタイ11:28—30) という聖句を読み、淡い平安を覚えたことがあります。別に深い悩みや重荷を抱えていたわけではありませんでしたが、この聖句を心のよりどころのひとつにしようと思いました。しかし、いざクリスチャンとしての生活の中に入ってみると、決してその聖句のように感じられませんでした。くびきは負い難く、荷も決して軽くはありませんでした。自分には荷が勝ち過ぎると思われる教会の召し、家族や会社の中での有形無形の圧迫、当時の私にはそれらの内に秘められていた主のみこころが理解できませんでした。しかし、今にして思えば、それらはすべて聖めのための懲らしめだったのです。では、主は何のために私たちを懲らしめ、聖められるのでしょうか。これを理解するには、主のみこころの深さを永遠の観点から考える必要があると思います。

ある宣教師の話ですが、彼の先祖は百数十年前にイエス・キリストの教えを求めて、イギリスからアメリカに渡りました。そし

て、そのひとりの母親から出た子孫が今では3千人以上となり、親族の集いも普通の建物では狭過ぎて、公園を借りて開いているということです。ひとりの母親の信仰によって、その家系から何百人もの宣教師が輩出し、何十万という人々に主の福音が伝えられてきました。私はその宣教師の偉大な先祖を思い描きました。艱難を忍び、主の懲らしめに耐えたひとりの女性がいたからこそ、悔い改めと罪の赦しを教える子孫が世に出てきたのです。

ひと組の夫妻に4人の子供が生まれ、その子供たちがまた、それぞれ4人ずつ子供をもうけていくとします。ある計算によると、このようにして子孫が増えていくと、125年後には5,460人、150年後には2万人以上になるそうです。もしひと組の夫婦が福音に帰依し、子孫が代々これを受け継いでいくなら、たとえ中に道を踏み過る人がいたとしても、このように無数の人々が主の忠実な息子、娘となっていくのです。そして私たちには、罪の汚れに染まらない何千、何万という子孫の父となり、母となる貴い機会が与えられています。逆に言うと、何千、何万という子孫が主の忠実な子供となるかどうかは、実に私たち一人一人の信仰生活にかかっているのです。

次の世で、自分の数千、数万、いや数十万の子孫がかわるがわるやってきて、「父よ、あなたの貫いた信仰は私の心に植え付けられて育ちました。見て下さい。私の子供たちは今、堅固な家庭を作っています。あなたの教えは、私を主のみもとに導いて下さいました。主の懲らしめを耐え忍んで下さったあなたに感謝します」という言葉を聞かされた時の喜びを考えてみて下さい。こ

んなに素晴らしいことがほかにあるでしょうか。

「シオンに就きて汝ら心安かれ。そは、一切生くる者わが手の中に在ればなり。汝らつつしみて、わが神なることを知れ。……およそ^{おそ}び^びずして^存し、心の清き者たちは^歸り^來らん。これらの人々とその子供たちは永遠の喜びの歌を^唱いて彼らのゆずりに来り、シオンの荒れたる地を築き上げん。……見よ、およそわが名を呼び、わが永遠の福音によりてわれを礼拝する者たち寄り集りて聖き場所に立つはわが^旨なり。」(教義と聖約101:16, 18—22)このような子孫と共に聖き場所に立ち、共に永遠の喜びの歌を歌えるよう、主の訓練に耐えていかななくてはと思います。(ほった・とおる 1938年生まれ、名古屋西ステーク部高等評議員代理)

私の発見

—福音の持つ行動的かつ実践的な面—



東京東ステーク部鎌ヶ谷支部、前岡山伝道部伝道部長

岡本 亮

「」の伝道期間中に得た数々の体験の中から、ひとつ興味深い発見についてお話してみたいと思います。

教義と聖約の中に、「およそ神の御前に自ら低くへりくだりてバプテスマを受けんと心に願ひ、真にへりくだりたる心と悔いる

精神とを似て進み出で、真に自己の罪をすべて悔い改めたることを教会員の前に証明し、進んでイエス・キリストの御名をその身に引き受け、而して終りまでキリストに仕えんと決心し、罪の赦を得るまで『キリストのみたま』を受けたることをその行いによりて真に明らかにする者は、すべてみなバプテスマによりてキリストの教会に受け入るべし」(教義と聖約20:37)というバプテスマに関する聖句がありますが、私はこれについて深く考えるところがありました。特に「真に自己の罪をすべて悔い改めたることを……証明し……その行いによりて真に明らかにする者は……」という部分がいつも気になっておりました。理屈ではわかるのですが、実際面でどのように運用されるべきなのかが、はっきりつかめなかったのです。

丁度そんな時、偶然にも岡山伝道部出身のふたりの帰還宣教師を伝道本部に招待する機会があり、彼らから思いもよらぬ素晴らしい答えを受けたのです。すなわち悔い改めの具体的な証明というのは「今までの生活を改めて善い生活を始める」ことの中にあります。今までよく寝坊をしていた人が、朝早く起きるようになり、今まで仕事ばかりして子供と遊ばなかった人が、仕事を早く切り上げて家に帰り、子供と遊ぶようになり、けんかの絶えなかった夫婦が、仲良くなり、すぐに手を出していた夫が、思いやりのある優しい夫になり、今まで愛していると一度も言ったことのない夫婦が、互いに「愛しているよ」と言い合うようになり、皿洗いをしたことのない子供が皿洗いをするようになる。このような実際的な変化こそが、悔い改めを「その行ないによ

って真に明らかにする」具体的な証明なのです。

さらに、もうひとつの気がついた点があります。それは、バプテスマを受ける以前、すなわち求道者の頃からこのような生活の変化を目指すなら、改宗への過程もより円滑なものになるという点です。これらのことを考えた時、「私たちは福音の真理を人々に宣べ伝えて、人々が悔い改めて『生活を変える』ようになるまで、最善を尽くして働かなければならない」というキンボール大管長の言葉が、改めて心に強く迫ってくるのを感じました。

この生活を変えていく過程は、求道者がバプテスマを受けるまで、さらには、バプテスマを受けた人が真の改宗をするまで人生のあらゆる段階において求められる重要なものです。

私たちは「チャレンジ」と称する安価なパンフレットを、当時地域代表役員であった菊地長老の許可を頂いて印刷し、悔い改めのレスンプランの補助教材として使用することにしました。このパンフレットは、実生活の中で福音をどのように応用していったらよいかを考えさせるためのもので、結果的には、求道者ばかりでなく、教える宣教師、さらにはジョイントする会員たちまでが自分の生活を変え始めるようになりました。

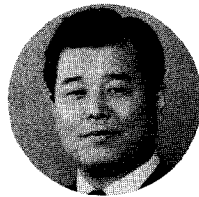
日本人は理論に弱い人が多いようです。レスンプランで素晴らしい福音の原則を教えられても、実際の生活面でそれがどのように関連し位置づけられるのかははっきりわからないうちに「はい、はい」と答えてしまう人がたくさんおられます。私たちは理論や原則だけではなく、実際にそれをどう

応用していくのかも教えたり、チャレンジする必要があると思います。

福音の持つ行動的かつ実践的な面が具体的な形となって表われる時、この教会は、都会といわず、田舎といわず、あらゆる場において、高く評価され、宣教師もうむことなく伝道の業を続けていくことができるのではないのでしょうか。(おかもと・りょう 1942年生まれ、東京東ステーク部高等評議員)

備えと決断

—一流の宣教師となるために—



横浜ステーク部横浜中央支部、前名古屋伝道部伝道部長

相良 健一

私は今、3年の伝道生活を終え、自分が味わった大きな喜びをひとりでも多くの若人に知って欲しいと念じています。私がこのようなことを言うまでもなく、伝道に出たいという熱い思いを胸に秘めている人は数多くいると思います。しかし、出たいと思いつつも、事が思うように運ばず、悩んでいる人も随分多いのではないのでしょうか。

何事においてもそうですが、準備をせずに成功を勝ち得ることはできません。「伝道」すなわち、神の道を伝えるというこの貴重な仕事であればなおさらのことです。ある日突然「伝道に出たい」と切り出して、

果たして両親の同意が得られるものでしょうか。18歳でバプテスマを受けたある姉妹の例ですが、彼女はバプテスマを受けて間もなく、伝道に出たいと思いました。それからは絶えず両親に教会のこと、伝道のことを話し続けて理解を求めました。そして20歳の時に申請書を提出し、20歳で伝道に出ることができたのです。しかも、伝道費用は両親が100パーセント援助してくれたのです。このような地道な積み重ねを早い内からしていくことこそ忘れてはならない大切なものだと思います。

宣教師になりたいと思ったら、伝道に出るまでは特定の異性との交際をしないというのも、大切なことです。指導者もよく言っているように、それが伝道の妨げとなることもあり得るのです。私は伝道部長時代、宣教師たちからの手紙を何通も受け取りましたが、一番うれしかったのは、「伝道部長、国のガールフレンドが手紙でさよならを言ってきました」という手紙を受け取った時です。多分そのガールフレンドは二度と帰って来ないでしょう。でも専任宣教師としての貴重な時間も二度と帰って来ないのです。ふたりの主人に兼ね仕えることはできません。一生に一度の機会をすべて主に捧げる覚悟は、伝道に出る前からしておかなければなりません。

ほかに、清い生活、毎日の聖典の学習、目標と計画性のある生活など大切なことが幾つかありますが、いずれにしても、大管長が望んでおられる一流の宣教師となるためには、良い備えが必要です。

良い備えともうひとつ、大切なのは決断です。ある日本人の宣教師を例に挙げてみましょう。彼は若い時に中国地方のある市

でバプテスマを受けた人です。高校2年生の時に、両親に伝道に出たいと言いました。彼はその家の跡継ぎだったこともあり、答えは絶対に許さないというものでした。しかし1年たった時に、ようやく許しが得られました。但し、お金は一銭も出せないという条件です。彼は19歳になったら宣教師になるという固い決心をし、高校を出ると同時に、鈴鹿市にある大きな工場の季節工になりました。そして1年間働き、伝道資金として150万円を準備したのです。

優柔不断では何もできません。ある意味で機会はずべての人に与えられています。しかし、それを自分のものとするかどうかは、決断ひとつにかかっています。

すり切れたスーツに身を包んで帰還していく宣教師の心の中には、神と人への愛で一杯になっています。親元を離れ、異なった環境の中で、彼らは人を思いやる心を身につけていくのです。求道者のためにする断食、祈り、そこにあるのは伝道を通してしか得ることのできない、無私の精神です。

私は3年間の生活を通して、言葉によってではなく、体で、主が生きておられることを知りました。正しい方法で祈り求めるなら、主は与えて下さいます。(さがら・けんいち 1937年生まれ、横浜ステークス部高等評議員)

訂正

10月号13ページの④の写真説明で、「1921年撮影」とあるのは「1961年撮影」の誤りです。おわびして訂正します。
●ローカルページへの来年度1月号掲載分締切は、11月15日。TDC「聖徒の道」編集室までどしどしお寄せ下さい。

神殿宣教師として奉仕して

—生涯忘れられない日々—



元神殿宣教師

仙台ステーク部仙台第1ワード部

塩 隆義

私 たち夫婦が神殿宣教師として働いた2年間の生活は、世の煩いわづらひを離れ、信仰の深い兄弟姉妹に囲まれて、何の憂いもなくひたすら神様にお仕えることのできた、まさに生涯最良の日々でした。聖なる神殿での喜びと祝福に満ちた働きは、終生爽やかな思い出として、心に微笑みと潤いをもたらしてくれるに違いありません。

様々な思い出の中から、とりわけ私の心に深く残っていることを書いてみたいと思います。

そのひとつは、大管長会事務局から私と妻宛あてに送られてきた召しの手紙を手にした時のことです。「あなたはこの度、聖なる儀

式を行なうため、主に奉仕するに相応あはれしいひとりとして推薦されました。それゆえに、あなたは戒めを守り、その行動にも外見においても最高の標準を維持するよう期待されています」という文面を目にし、「むべなるかな」と痛く感動致しました。神様の御側そば近く仕える者として、靈的に極めて高くなければならないのは当然のことと考えたからであります。と同時に自分自身を省みると、とても勤まりそうもないと恐れも抱きました。しかしその反面、なかなか得難い機会ですので、何とかして神殿で奉仕したいとの気持ちもあったのです。

いろいろ思案している内に、ふとイザヤ書の中のひとつの聖句が心に浮かびました。それは55章の中の「わが思いは、あなたがたの思いとは異なっている」という聖句でした。この聖句は私を非常に力づけ、励まし、そして安堵あんぷを与えてくれました。「そうだ、自分は幾ら背伸びしてみても、おん詮、一介のチツポケな人間にしか過ぎないのだ。神ならぬ身でとてもこの様な高い標準を保てるはずがない」と思いますと非常に気が楽になってきて、この上は思いを正し、行ないを慎み、身なりを整えて、できるだけみこころに添えるよう努めればいいのではないかと考え、意を決して、至らぬ者ではありますが、喜んで召しに応えたい旨の返書を送りました。

しかしながら愚かな身の悲しさ、いざ召しにあずかりますと、初心を忘れて、愚かしい行ないをしたこともありました。今さらながらに恥ずかしく、申し訳なく思っております。

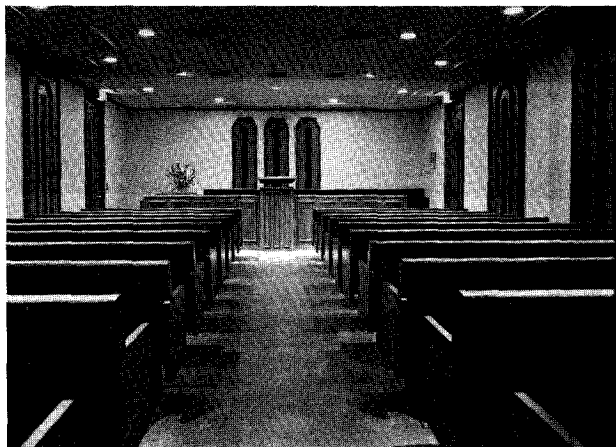
神殿宣教師としての果たすべき役割はいろいろありますが、それと共に、神殿宣教師の特権としての喜びもあります。それは神権を行使する機会が極めて多いことです。神権の行使は取りも直さず儀式の執行であり、それはすべて、死者と生者の救いの喜びにつながっています。目で見ることはかないませんが、身代わりの儀式の祝福にあずかった死者たちの喜びは決して生者のそれに劣るものとは思われません。

また一方、大きな期待を持って主の宮居に参入し、聖なる神権の権能によって祝福され、夫妻や親子の結び固めの儀式を受けた兄弟姉妹が、満面に笑みをたたえ、また、宿願成就の喜びと安堵の色をかくし切れず、感激の涙に目を潤ませている姿を見たことも少なくありません。それからまた、繰り返し繰り返し、身代わりのエンダウメントを受けることにより、すでに世を去った自分自身の遠い先祖や肉身を初めとする多くの人々の救いに寄与することができただけ

でなく、自らの福音に対する理解を深め、信仰と証を一層深めることができましたことも大きな祝福であったと思います。

その上、これまでまだ神殿に入ったことのない息子のひとりが、初めて神殿に参入し、神殿長はじめ皆様の温かい御配慮の下に、洗いの儀式に始まり、親子の結び固めに至るまで、一連の儀式をすべて滞りなく受けることができましたことは感謝に堪えません。その最後の儀式が完了した時の感激は何とも申し上げようがなく、込み上げてくるうれしさにあふれる涙を押さえることができませんでした。この儀式にご出席下さった兄弟姉妹の方々から次々に手を取って祝っていただく度に顔の熱くなる思いが致しましたが、最後にアンダーセン神殿長が両手を取って、優しい目差して、「おめでとう」と祝って下さった時には感極まって神殿長の胸にすがり、心いくまで喜びと感謝の涙に咽びました。

このように振り返ってみますと、2年間の召しを気持ちよく全うすることができたのは、すべて神様の深い愛と神殿長初め指導の任に当たって下さった方々、同僚の兄弟姉妹、そしてこの神殿で奉仕して下さったすべての人、温かい親切と助けによるものと深く感謝しております。(しお・たかよし 1906年生まれ)



◀東京神殿礼拝堂

「汝らわが言うところを 行わば…」



塗装業

町田ステーキ部
町田第1ワード部

加藤喜司

結

婚した当時、私は、4、5人のグループを組んで、ビルの塗装の仕事をしていました。

ある時、リーダーの人が私にこう言いました。「毎週日曜日に教会を休むのは困る。仕事をとるか、教会をとるかよく考えて返事をするように。」私はそう言われた瞬間に心の中で主の道を選んでいました。これからの自分の仕事のことや、家族のことを考えると本当に大変なことでしたが、私は戒めを守ることに決心しました。

それ以後私は独立し、ペンキ屋としてスタートしました。宣教師と同じように戸別訪問を始めました。一軒一軒戸をたたき、自己紹介をして仕事を求めました。しかし、世の中はそう甘く

はありません。思うように仕事がありませんでしたが、初めて仕事をやらせていただいた時の喜びは、今もよく覚えています。その様な状態にあった時も、家内と私は、きちんと生活していくことができました。

長女のお産が近づいた頃は経済的に一番苦しい状態でした。そんな時に、土曜、日曜日ならできるという工場の塗装の仕事がきました。咽から手が出るほど仕事が欲しい時でした。しかし私は、安息日を守ることができないという理由でその仕事を断りました。入院費用は父親からの借金でしたが、長女は無事に生まれました。経済的には貧しくとも、私たちの家族には平安がありました。

まだ町田ワード部が古い建物を借りて集会している時に、入口に小さな看板を立てることになり、私がおの責任を受けました。看板を看板屋さんに運び、文字を書いてもらうことになり、私は仕事を休んで持ってきました。打ち合わせをしていると、隣の作業所の方が来られて、「あなたはペンキ屋さんですか」と聞かれました。なぜなら、私はペンキだらけの仕事着を着ていたからです。彼は「今すぐ仕事をしてくれるペンキ屋さんを探しています」と言って、ある会社を紹介してくれました。その会社が、現在まで続けて仕事を出して下さる建設会社でした。それからは次々に仕事が出されて途切れたことはありません。その会社の責任者の方は、お酒もタバコも飲まない、とても謙遜な方です。

この会社の仕事を始めてから8年が過ぎました。今は、自分の家を持つことができ、什分の一を納め、税金を払い、平和に生活できることを本当に感謝しています。私は



常に、神の国と義とを一番初めに求めてきました。その結果がどんなであろうと後悔したことはありません。

私は、自分の生活を通して得た、ひとつの証があります。第一に神の国と義とを求めても、与えられたチャレンジに向かって一生懸命努力しなければ、何物も与えられないということです。神の国と義とを第一に求めたとしても、自分では何も行なわず、その結果を神の責任にしているようでは、何の報いも得られるはずがありません。主

は言われました。「⁴⁴汝らわが言うところを行わば主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約88章10節)

主は確かに私たちを愛して下さいます。町田ワード部の看板を作る奉仕をさせていただきましたが、天のお父様は小さな働きに対して大きな祝福を下さいました。

(かとう・よしじ 1946年生まれ、町田ステーキ部高等評議員)



78歳のバプテスマ

新潟地方部新潟第2支部

田部 ムツ

あ

る日若いふたりの青年が家の前を行ったり来たりしているのがガラス戸越しに見えました。どこかの家を捜しておられるのかと思っておりますと、その青年が「今日は」と、私の家へ声をかけてきました。出て見ますと末日聖徒イエス・キリスト教会のお話をとのことでしたので、「モルモンですね。実は私の娘が東京の小岩の教会に行ってます。名前は石田です」と申し上げると、よく知っているとのことで非常に驚きました。

後日ふたりをお迎えし、いろいろお話を聞かせて頂きましたが、心洗われる思いが致しました。私は以前から娘の家へ行く度に、どの子供の家にもない、温かな雰囲気のあるのを感じ、子供のしつけなどを見て

も、本当に美しい家庭だと、喜んでおりました。今年の2月、夫を亡くしましてより、つくづく霊のこを感じ、いい知れぬ寂しい思いをしておりました。娘たちから神の国の霊界の話聞く度に自分もそういうところに入れていただけたらと思っておりました。

赤木、ホワイト両長老のお勧めと、自分自身の決心により、バプテスマを受けさせていただきました。神のお恵みの深さをつくづく感じます。余命いくばくもない老人ですが、生あるかぎり神のお力におすがりして、悔いのない一生を送りたいと思います。(たべ・むつ)

*田部ムツ姉妹は、東京東ステーキ部東京第5ワード部の石田監督夫人のお田さんである。

読者の
ひろば

AIR MAIL

ロサンゼルス伝道部に
召された日本人宣教師
からのお便り

力の泉

「**聖**徒の道」は私にとってとても大切な心の友であり慰めであり喜びです。実は何カ月間「聖徒の道」を読む機会がなかったのですが、神戸伝道部長夫人ポーター姉妹の計らいで久しぶりに「聖徒の道」を手にすることができました。読んでいくうちに指導者の証を通して真理を知る喜びが胸に広がっていくのを覚えました。また、同じ証を持ち世界の各地で主に仕えている兄弟姉妹たちとの絆を感じて、とても励まされました。また特に、日本の地で多くの兄弟姉妹たちが素晴らしい証を持って忠実に主のみ業に励まれている様子を知って、日本人の聖徒の素晴らしさを改めて感じました。

私は今日本を離れ、アメリカの地で伝道していますが、ここでも心の謙遜な、また

主に従順な人々が神の王国に次々と迎え入れられています。この尊き主のみ業はすべての人々に及び、悔い改めを望むなら誰でもこの羊の群れに加わることが許されているのです。世に悪がはびこり、人々の心は主の教えから遠く離れている中であって、神様から与えられた正直な心を保ち、真理を求めている人々に出会う時、私はこのみ業の価値を改めて知ります。先日ある黒人の青年にレッスンをしましたが、彼は「このような素晴らしいメッセージを聞かされるのは初めてです」と感激をもって回復された福音のメッセージを受け入れました。

私たちが生活の基としているこの福音はイエス・キリストの福音であり、私達を救いに導く真の福音であることを心より証します。また、「聖徒の道」はこの福音を実践し、神を知る人々の貴重な体験や証が記されており、私たちが霊的な糧を得、励ましを得ることのできる力の泉です。ひとりでも多くの人々がこれを読み、福音に生きる喜びを共にすることができますようにと願っています。(ロサンゼルス伝道部専任宣教師・中出敦子・35歳・ホームワード部は神戸ステーキ部神戸ワード部)

AIR MAIL

アメリカで知った
家庭菜園の楽しさ

毎月「聖徒の道」を届けて下さり、有り難うございます。「聖徒の道」は海外で生活する私にとって生命の水のようなものです。やはり日本語で読むとピンとくるのです。ローカルページを読む時、日本の地が、今本当に祝福されていることが良くわかります。

私たちは3年前、主人の留学のため（浦和ワード部から）ユタ州セントジョージにきました。希望を持っての自費留学とはいえ、当時6歳、5歳、3歳、1歳半の4人の子を連れての生活は大変でした。それでも隣人すべてがモルモンという町で、毎日楽しく過ごすことができました。本当の愛を示すことが、どのようなものを学んだ

のも、この町へ来てからです。そんな中で、少し後に私たちと同じ目的で渡米された一家族を知りました。日本にいた時は会ったこともなかったのですが、不思議な出会いで、その姉妹のお母さん、兄、姉は良く知っているという間柄でした。会った時から以前からの知己のようにして頂きました。

畑作りの経験などそれまで一度もなかったのですが、豊かなユタの土地での無難な豆作りから始め、ふだん草（スイスチャード）、胡瓜（きゅうり）と少しずつ数を増やしました。土地の人から見れば、ままごと遊びにしか見えないような畑です。それでも毎日、豆やふだん草、胡瓜も3～5本収穫できました。アスパラガスもあったのですが、わからなくて何の雑草だろうと思って、後で大笑いしたこともあります。

訪れる機会のある人には、必ず貯蔵の話聞き、実際に見せて頂きました。自分の庭や畑でとれた果物や野菜の見事な瓶詰め（ジャム）の陳列を見せて頂いたり、18年前のもの



左：家庭菜園で取れたチエリートマト（ミニトマト）を手にする高井姉妹。
右：フェニックス・ウエストステーク部の扶助協会主催のホーム・メイキング・フェアに出品されたスクワッシュの数々。左手奥に見えるピーマンと比べると、その大きさが想像できる。

いうピーチを御馳走^{ごちそう}になったりしたこともあります。皆とても日本では想像できないような、スペースを持っています。

アリゾナ州フェニックスに移ってからは、種類を増やしましたが、ここでは暑さとの戦いです。(4月頃から暑くなり始め平均26.6℃、7・8月は44℃、涼しくなるのは10月末)土地の狭さと粘土質の土^ど壤のため、十分に根が張らず、何度も失敗を重ねました。胡瓜、メロンはうまくいきませんでした。それでもズキニ、スクワッシュ、オクラは素晴らしい生長ぶりを見せてくれます。ふだん草、トマトも飽きることなく食べ続けています。まだ保存の段階までにはいきませんが、土が与えてくれる豊かな実りに感謝の気持ちを新たにしています。この経験を生かし、日本に帰ってからもぜひ畑作りをしたいと燃えています。(アリゾナ州フェニックス・ウエストステーク部第37ワード部・高井三千子・33歳)

ベルサイユワード部で 会ったデイマール兄弟 の改宗から

怒りの中で宣教師の聖書を引き裂いた求道者。何と激しい人でしょうか。

「聖徒の道」9月号『予期せぬ収穫』のデイマール家の改宗談をぐいぐいと引き込まれるようにしながら読みました。人が福音を受け入れるまでの間には、時に驚くようなドラマがあります。しかし、本当に驚い

たのは、記事を一通り読み終えてから、何気なくタイトルページの写真を見直した時のことです。よく見ると、2年前ヨーロッパ各地を旅した時に、フランスで会ったことのある家族なのです。

初めてベルサイユワード部を訪れた日、最初にお会いしたのがデイマール兄弟でした。彼はフランス語のわからぬ私に笑顔で終始親切にして下さいました。ベルサイユ郊外ヘビクニックに行った時、元気にサッカーに興じていたデイマール兄弟と息子さんたち。今は懐しい思い出です。フランスはカトリックの根強い地ですが、彼の改宗にこのようないきさつがあるとは思いませんでした。宣教師たちはどれ程忍んだことでしょうか。「……汝らはわれに由りてかれらに模範をあらわすよう忍耐強く勸忍をし、また艱難^{かんなん}に堪えよ。さらばわれは汝ら^{なん}をわが手に使い多くの人を救わん」(アルマ17:11)という主のみ言葉を思い出します。

ベルサイユワード部は、宮殿からさほど遠くない、しっとりとした美しい住宅街にあります。アメリカ人家族もおり、集会は2カ国語です。パリ滞在中、私はこのワード部の多くの方々のお世話になりました。彼らを想い出す度に、国の違いを越えた神聖な絆を感じるのは、この美しい福音の力ゆえです。

この記事を読み、人の霊にしみ込む「みたま」の驚くべき力、伝道の大切さ、宣教師への感謝、そして主のみ業に畏敬の念を抱かずにはおれませんでした。(東京西ステーク部立川支部・西原雄二・33歳)

青少年自ら計画し、 実践した神殿参入ツアー

名古屋ステーキ部から26名が参加

19

82年9月15日、敬老の日、名古屋ステーキ部の青少年26名が、片道6時間のバスツアーを組んで東京神殿を訪れ、家族ファイルによる死者のための代理の儀式を受けた。

青少年が主体となって進めてきたこのプログラムは、今年の6月から計画されてきたものである。

最初、春日井支部から召集された6人の実行委員が中心となって、各ユニットで家族の記録の提出を奨励したが、結果的には名古屋ステーキ部設立以来の提出枚数があった。伸び悩みを言われ続けてきた青少年たちの指導性にも一段の向上を見ることがで



▲死者のための代理の儀式を終えた青少年たち

き、ステーキ部発展へのひとつの明るい材料をもたらしてくれた。(レポーター：飯田忠弘・名古屋ステーキ部高等評議員)

神殿に参入して

名古屋ステーキ部刈谷支部
板倉 みゆき(18歳)

9

月14日の夜出発して、15日の朝、雨の中神殿に着きました。東京神殿はオープンハウスの時に來ただけで、今回は自分の直接の先祖の死者のためのバプテスマなので、とても楽しみにしていました。死んだ人たちのことについては、系図を書きながら、母にいろいろ聞いていたので、自分の知っている人のように身近に感じることができました。神殿はとても霊的な雰囲気、私たちは自然に、ひそひそ声で話すようになっていました。

やがて私は真白な服に着替えて先祖の身代わりにバプテスマを受けました。水に沈められた瞬間、自分がバプテスマを受けた時のことを思い出して胸がいっぱいになり、先祖の人が喜んでいる様が目に浮かぶようでした。この人たちは死んでからずっと、どんなにこれを待っていたことでしょうか。その人たちの救いのために働くことができ、とてもうれしく思いました。また、本当に神様を身近に感じることができ、証を強めることができたので感謝しています。

イエス様が私たちの救い主であり、この教会が真実であることを証します。(いたくら・みゆき)

バーバラ・B・スミス姉妹, (中央扶助協会会長)

シャーリー・W・トーマス姉妹, (第二副会長)

来日する



バーバラ・B・スミス姉妹 シャーリー・W・トーマス姉妹

この度、中央扶助協会会長バーバラ・B・スミス姉妹と第二副会長のシャーリー・W・トーマス姉妹が、韓国で開かれる国際女性大会に韓国政府の招きによって出席なさる途中、日本にお立ち寄り下さいました。

急なことでしたので準備も十分整わないままお迎えすることになってしまいました。終始にこやかに私たちの労をねぎらって下さり、かえって恐縮する場面が何度かありました。大変お疲れになっていらっしゃるにもかかわらず、朝早くから夜遅くまで精力的に一日のスケジュールを消化なさいました。ここにすべてをお伝えすることはできませんが、多くの方にその祝福を味わっていただくことを願って、一部をお伝えしたいと思います。

9月19日、この日は朝から小雨模様で一日中うとうしいお天気でしたが、ステーキ部センターでの聖餐会に出席された後、おふたりはすぐに2、3の姉妹のお宅を訪問されました。

最初に訪れた姉妹のお宅では一緒に食事を召し上がり、出された食物にとっても感謝なさりながら、いろいろなことを質問されました。食糧貯蔵はどうしているか、という

ことから、毎日どんな物を食べているのか、朝は何時に起きるのか、洋服は何着持っているか、また布団に興味を示され、その中には何が入っているのか、毎日の手入れはどうするのか、と言った日常生活について大変興味深くお聞きになりました。

手作りの椅子カバーやランチョンマット、のれん、カーテン、置物や装飾品に感嘆と賛美の声を上げられ、日本の姉妹はその心の美しさや自然環境の美しさを生活の中に取り入れていると感心されました。特にトーマス姉妹は、後の集会でも話されましたが、日本の姉妹の美を求める気持ちが、普段の生活の中によく反映されていることを、これから会うすべての姉妹たちに強調したいとおっしゃいました。

また次に訪問されたお宅では、畳に関心を寄せられたり、狭いアパート住まいにもかかわらず、貯蔵に熱心に取り組んでいる姿を見て感動されました。

最後に訪れたお宅でもやはり美しく飾りつけがしてあるのを御覧になり、そこに住む人の心のゆかしさ、美しさに感激されたようでした。これらの外にも、両親が子供を大切にしてい、教育に大変な力を注いでいることがよく分ったとおっしゃって

ました。

訪問を終えて休む間もなく東京地区の7つのステーキ部扶助協会会長会とのミーティングの後、6時から特別集会に臨まれました。その中でトーマス姉妹は、スミス姉妹が本当に素晴らしい指導者であることを証なされ、そのことを深く感謝され、キンボール大管長と共に食事をなさった時そこで交わされた会話について話して下さいました。扶助協会に何かおっしゃりたいことがありますか、という質問に対して大管長はただひとつのこと「日記をつけなさい」と、記録することの大切さを述べられただけだったということでした。

スミス姉妹は共に働いて下さるトーマス姉妹に心からの感謝を述べられた後、「準備すること」「学ぶこと」の大切さについてお話になりました。

10人のおとめの話から、ランプの光は、信仰、摂生、証、真実からやってくることを準備することが自信につながるということを教えて下さいました。自信をもって召しを遂行するために一番必要なのは、よく準備することであると言われました。また、ガンに冒されながらも自分に残っている最後の力を振り絞って召しを遂行したある霊的生活教師の姉妹の例を話され、私たちに強い感銘を与えて下さいました。

扶助協会は「学ぶ」ということに対して心向着ているが、学ぶということは困難、苦難を乗り越えるひとつの手だてになる、能力というものは自分の手で勝ち取るものであり、各々が自分の目標をたて、その分野の中で熱心に求めるべきである、母親の

付 属 図 書 館

役割について学ぼうとしない女性がいるけれど、この世で最も偉大なことはいかにして素晴らしい母親になるかということである、家庭は最大の注意を払うべき所であり、理想が反映される場でなくてはならない、父ヨセフの模範と母マリヤが与えた感化がイエスの指針となったように、人はまず最初に、慈悲、寛容、忍耐といった徳を家庭の中に反映し、家庭の中で自制を学ばなくてはならない、と言ったことについても話して下さいました。

ふたりの指導者に接して、最も強く心に残ったのは、「どのようにしたら人々に仕えることができるか」ということを絶えず考え、また実際にそのように努力なさっている謙遜な態度でした。

集会の後、多くの姉妹たちが挨拶するために礼拝堂に並んで順番待ちをしているのを御覧になって心を打たれ、一人一人と実に丁寧に、優しく愛と感謝と思いやりを込めて挨拶を交わされました。この模範こそ、私たちが扶助協会で働く時に、また家庭や学校や社会で働く時にいつも思い起こし、身にまどっていなくてはならない徳のひとつであることを痛感しました。

「指導者のために祈って下さい」とおっしゃった大管長のお言葉が真実の響きをもって迫ってくるのをしみじみと感じました。人格霊性共に並外れた素晴らしい指導者に接し、思いを新たにすることのできた素晴らしい体験でした。(レポーター：田中尚子・東京ステーキ部扶助協会会長・三鷹ロード部所属)



表紙：中央初等協会会長会（左から第一副会長バージニア・B・キャンノン姉妹，
会長ドゥワン・J・ヤング姉妹，第二副会長マイカリーン・P・グラスリー姉妹
裏表紙：初等協会の子供たち